第72・73号　(50円)
昭和56年5月25日

内　容

第113回大学共同セミナー …… 1
科学技術とその独創性…… 5
第112回大学共同セミナー …… 8
私の思想経験の中のサルトル… 9
吉阪隆正先生追悼……12
事業部だより……10
わたしたちの合宿……11
法人ニュース……13
千人会……14
利用状況……15

セミナー・ハウス
SEMINAR HOUSE NEWS

発　行
財団法人　大学セミナー・ハウス
≪所在地≫
東京都八王子市下柚木(〒192-03)
電　話　0426-76-8511～3
振替口座　東京 5-74590番
編　集
大学セミナー・ハウス
企画室
編集人・中川秀恭　発行人・岡山猛
製作　中央公論事業出版

第113回大学共同セミナー
シンポジウム要約

個性と創造性

司会　岡村陽一郎　宏子

粟津潔　江沢洋　大森荘蔵　樺山紘一　杉田弘毅　中野博司　芳賀徹

――第一部――

岡村　これから今夜と明日の午前の二回連続で、「個性と創造性」と題してのシンポジウムを行います。発題ならびにご討議をいただく諸先生はいずれも創造性豊かな、しかも個性の強い方がたですので、これから私の申し上げる順序に従って筋書きどおりに論議が進むことは期待できませんが、一応予定を申し上げておきます。

まず最初にそれぞれご自分の専門について一言紹介していただいた上で、その立場から「創造性をどのように考えるか」を簡単に述べていただきます。そのあとで、ではそのような創造性は一体必要なのか、それとも無くてもいいものか、さらに創造性が発揮される場合の心のメカニズムはどういうものなのか、今日のところはこんな問題をめぐって自由にご討議いただけたらと思います。ご発言は席順にしていただくとして、粟津さんからどうぞ。

創造性とは

粟津　この二十数年、絵やデザインの仕事を中心に、毎日のように新しい仕事をしているので、改めてそうしたことを考えたことはないんです。主な仕事といえば、ここ三年ほどアントニオ・ガウディという一九二六年に亡くなったスペインの幻想的な建築家の研究、かれの映画もつい最近作りました。それから名古屋の民俗学博物館の建築、これは十年ぐらいかかります。その他劇場の緞帳のデザインとか、それに月に十冊ぐらい、本の装幀があります。あるいは劇映画の演出、セットのデザインなど、始まるとその作品の世界にのめりこみます。それらの場合、ぼくはやはり、何か今まで他人がやっていなかった世界に入っていく、そのことの快感、快楽を求めてきたように思います。

樺山　尻とりの形になりますが、今話に出たアントニオ・ガウディのことから始めます。私はもともとヨーロッパ中世史を仕事の中心にしていますが、たまたまガウディの未完の仕事であるバルセロナの町の聖家族教会の仕事を、すぐ隣りに住むことになり朝な夕な見たわけです。これは建てはじめてかれこれ百年、まだ三分の一ぐらいしか出来ていない建築です。このたいへん個性的な芸術家については、かれの生れ育ち暮らしたカタロニアという土地をぬきには考えられない。かれのほか、ホアン・ミロとかサルバドール・ダリとかパブロ・カザルスといった極めて個性の強い芸術家がいずれもこの土地から出ている。この土地の歴史的個体としての存在を考えざるをえないというのが私の最近の仕事、『カタロニアへの眼』の動機になっています。

ところで、何か創造的な仕事といえば、当然個性的な仕事のように考えられるけれども、果たしてそれは一人の頭脳の中から出てくるものか、あるいは皆でワイワイ議論する中から出てくるのか、私自身の経験もあって、一つの疑問になっています。

個性と環境と

村上　樺山さんの尻とりを続けさせていただくと、今お話にあった個性と環境の問題は、私も私なりに考えてみたことです。私の専門である科学史の場合、自然科学の分野で創造的な仕事をした人たちのいわば英雄列伝という趣きを持っています。ところが、そこで創造的だとされるものは、現在の自然科学の立場からの評価であって、そこにはいわゆる勝利者史観が見られるといっても過言ではない。粟津さんの言われる、これまでないものを創り出したところで、それが今日の科学の体系から見て肯定されなければ科学史の中で評価されないことになる。今まで全然評価されなかった仕事にもう一度光をあてることをふくめて、当時の歴史的社会に踏み込んで、科学史そのものの読みかえということが、いま私の仕事の重点の一つになっています。

中野　私は音楽史、とくに18世紀後半のいわゆるクラシック時代をやっています。中でもヨーゼフ・ハイドンという作家と二十数年つき合ってきています。そこで一番感ずるのが、今お二人からお話の出た〝環境と個性〟の問題なんです。当時の音楽家一般の例にもれず、かれはある貴族のお抱え音楽家であって、当然その与えられた制約内でクリエイティブな仕事をしなければならなかった。ハイドンを交響曲の創始者にしたのはかれの個性というより、かれをとり囲む音楽環境の変化だったといえます。かれが大作曲家といわれる由来も、結局はかれがバロック音楽をもう一度見直したことにあるので、過去の再評価ということです。これはモーツァルトとも同じ事情です。それと、ウィーンという土地の役割、ウィーンという歴史的な土地を舞台にしての伝統と革新の問題、その間の相剋の中に、まさに創造性の問題がふくまれているように思われます。

らくだと獅子と小児と

杉田　私はドイツ文学と比較文学が専門ということになっています

が、とくにニーチェをやっています。かれはヨーロッパ文明全体を相手にして、あらゆる価値の価値転換ということを言ってきた。これが大変な破壊と創造の起爆力になったわけですね。また、かれは『ツアラトゥストラ』の中で創造者ということばをさかんに遣う。そして個人の発展史における三段階の変化を言います。その筋書きをいいますと、最初に人間はらくだだという。らくだが転じて獅子になり、獅子が転じて小児になるというのです。まず、らくだの精神、これはあらゆる重い物を背中にしょって、あらゆる伝統の重荷ですね、それに従い学ぶこと。その上で敢然と自己否定をする。今まで汝なすべしと言っていた者に対して、我は欲すということを言わなければならない。暴れまわる砂漠の獅子という表現をとっていますが、獅子にとどまっていても駄目で、一転して幼な子になるわけですね。そのときは過去の闘争とか否定とか、そうしたもの一切を忘れて、はじめて新しいものが創り出される。以上のことをニーチェはたいへん詩的な美しいことばで語っています。これには現代に対してもたいへん比喩的な洞察がふくまれていて、今や否定、懐疑の時代から新しい価値創造の時代に入りつつあることを予言しているように私には思われます。

江沢 私は理論物理学が専門ですが、日頃やっていることを考えますと、なにも創造的になろうかなんてやっているわけではない。一つのことが分かったと思うと十ぐらい分からないものが出てくるといった具合です。そうした作業を創造的と言ってくれる人はいないようですが、朝永振一郎先生のことばをかりれば、理論物理学というのは普通の人が思うように計算して答えを出すようなものでなくて、もののイメージをほうふつとさせるまで自分でその本質をつきつめるといった感じですね。

日常の中の発見

大森 私は哲学が専攻ですが、創造性という場合、あまり難しく考えないで、むしろ一市民が日常生活の上で毎日経験しているとおりの、ものをつくり、またこわす、いわば創造と破壊の流れを考えます。江沢さんが物理学について言われたと同じで、哲学でも創造とかクリエイティブとかいうことばは不要で、むしろ害があるんじゃないかと思います。よく分からないものをよく分かろうとして、ものを見つめる。杉田さんの言われる価値の転換ではなく、むしろ価値の維持が必要です。仕事全体について創造的であるかないかの評価基準をもつことはあまり生産的ではあるまいと、私は思います。

江沢 今のお話は同感で、逆に言えば何をしていても創造ということはあるので、たとえば他人の書いたものを読んでいるときでも、自分で組立てていかなければ分からないわけで、それも一つの創造と呼べるものとぼくは思います。

粟津 (素材の新しさを利用することによって創造性を主張するがごとき現代芸術の一部の傾向についての一学生からの質問にこたえて) たとえば、芸術は気高いものだという古典的な概念に対して、展覧会場に便器を一つのオブジェとして持ち込むというようなことは、日常われわれが見ているものが、その日常の場をはなれたとき、異質なものに見える。これも見ることの一つの創造性ですね。そうした一種の異化効果というようなものに走る傾向もあって、現代芸術に表現の拡散から解体への状況が見られるのも事実です。

村上 われわれは創造性の呪縛から解放されるべきだというのが私の根本的な考えです。創造的であれあれと尻をひっぱたかれる考え方、創造的教育という考え方には天才教育と同じに自己矛盾をふくんでいます。創造性とは結果に対するある種の歴史的な概念であって、ある限定された状況やコンテキストの中で云々することは全くナンセンスだと思います。

岡 今の村上さんのご発言には少し誤解を招く点があるように思います。村上さんの否定されたのは何かとくに意図的にレッテルをはられた、いわゆる創造性教育についてであって、広い意味での教育作用による創造性の展開の否定ではないと思いますが。

村上 そう。その意味では創造的でない教育はないと私は考えています。

樺山 創造性というものを何かたいへん大それたものに考えるべきではないという意見に私も賛成です。創造的なものを構成する要素はいわば自分たちの手許にあるのであって、それをどう組立て、組替えるかに問題があり、新しい発見があるのだと思います。

大森 一つ気になることですが、理論物理学では問題は新しいのでしょうが、哲学ではむしろひどく古い。プラトン、アリストテレス、孔子、孟子の問題が現在の問題なんですね。

偶然性と異種交配と

粟津 ぼくは時どき偶然性みたいなものを芸術の世界では感ずるんですね。それと創造性とをどう結びつけて考えたらいいのか。たとえば古典的なもの、これらに私たちが触れて得た衝撃は、古典の意味や価値についてそれほど知らなくても、かならず自分たちの次の作品の上に大きな触発力になってきます。今の新しい芸術家にとって、古典をどう見るかが大きな課題になっているのは事実です。

それともう一つ。現代芸術の中にある一種のプリミティズム。芸術家という特別の存在もない、何の変哲もない、ごく日常の、生産し労働する人びとのいわゆる民俗芸術なんかを見ると、全部をふくめてかれらは生きているわけですよ。生きていることがそのまま芸術になり、信仰になり、価値になっていく。そんな世界の新しい発見が20世紀の芸術の根底をゆるがしている。ヨーロッパの伝統的な遠近法の絵画をつぶすのに、それらが大きな影響力をもっています。ピカソにしても、ルドンにしても、エイゼンシュタインにしても、パウル・クレーにしても、東洋の影響を非常に受けている。共通して自分の中からヨーロッパ的な部分をなくしたいという傾向が強いのです。ですから、何か異種交配というか、違った種が交配するときに思いがけない発見が生まれることがあり、そこに偶然性の芸術創造の中での大きな役割があるように思うのです。とくにそれが一人の芸術家の場合でなくて、大きな集団的な力となって現れる場合は、そこに強烈なカルチャーの誕生があるのであって、天才がポッンと出てくるようなものでない、別の図式があるように思われるんです。

樺山 そうですね。歴史上で見ても、極めて創造的な仕事は、ある時代にまとまった人びとの間から出てくるわけです。現代芸術が一九〇〇年から一九一五年ぐらいの間にパッと花開いたのには、おそらくそこに集約されたさまざまな要素があって、その中から自動的に出てくるのではなく、しかしまたかれら芸術家たちの上に当時のヨーロッパがどんな条件をかぶせていたかの問題があって、この両面を解かないと、いわゆる創造性の問題は解けないと思います。さっきから出ている議論にも関連しますが、人間の内発的なものだけを創造といい、他人から、あるいは他所から来るもの、たとえばプリミティズムとか日本趣味とかいったものを、ただ他動的な、非創造的なものとするような問題の立て方ではまずいのではないか。

生物としての観点

野田 (運営委員) 私は今日は黒子の役で出ているので発言すべきではないと思いますが、皆さんのお話の中に生物という視点が全然落ちているので一言申し上げます。皆さんも生物の一員であるはずなのに、そういうことはおくびにも出されない。だけれども、生物であることに間違いないし、生物はたとえ自由にやっているつもりで

も、その行動のほとんどは遺伝子によって決められているわけです。ただ少し高等な生物にインプリンティング（刷り込み）ということがあって、自分の育ったところから何を学ぶかということが決まっているということがあります。たとえば、うぐいすは鳴き方を教えてやらないと、あの鳴き方はやらない。だけれども鳥をそばに置いて鳥の鳴き方をやれといっても、それは覚えない。ちゃんとうぐいす流の鳴き方だけを覚えるようになっている。人間にもそういう面が多分にあって面白いのです。

先程から独創性、独創性と言われるけれども、われわれの考えることにはどのくらいのヴァラエティがあるのか。たとえば百ぐらいしかないとすれば、案外端から端まで行き着いてしまって、また元に戻らざるをえないのかも知れない。脳の中の細胞の数は大体百億ぐらいだといわれますが、それを完全に使っているかどうかが問題です。

セミナー指導の先生方――左より前列，野田，岡，杉田，飯田，樺山，江沢，山岸，後列，中野，芳賀，大森の諸氏

岡　生物であるという視点を度外視したわけではなくて、はじめにお断りしたように、そのような活動がなされる時のメカニズムは一体どんなものなのか、そこから考えられる創り出すということ、その新しい可能性と限界を考えれば必然的に生物学的考察が入ってくることになる。それを次にお願いしたいと思っていました。また、そのような可能性を阻止したり伸ばしたりする社会的枠組や教育の問題への展開も、明日の問題になりましょう。では、あとは明日ということで。

――第二部――

岡　昨日の議論にひきつづいてシンポジウムの第二部に入りたいと思います。昨日ご欠席の芳賀先生も間もなくおいでになり、議論も一だんと活発になることと期待しております。では、今日は発言順を逆にして大森さんからどうぞ。

自分の中の新しいもの

大森　話の糸口として申します。自然科学にしても人文科学にしても、一番大切なのは自分にとって新しいものの追求ということであって、それが社会にとって、あるいはその学問の歴史の上でも新しければ結構だけれども、そうでなくてもいい、自分自身の中の未知のものの発見、解明、これが一番大切だと私は思います。

中野　演奏する場合も聴く場合も同じで、その音楽の中からつねに新しいものを引き出そうとする姿勢ですね、大切なのは。

粟津　昨日も申しましたように、芸術的な創造の場合、偶然というものが重なっている。自分の意図したものの上に、何かもう少しふくらみを持ったものを期待する。作品の完成をいつも延期しているような感じが実感として残っています。ガウディが、世界すべては創造であり神の創造物なんだ、だから私たちに創る必要はない、ただ見出す、発見するだけだ、と言う。かれの発想はたいへん自由なんですね。その方法論をほとんど自然から学んでいる。自然を書物として読むと言っている。かれの言う発見というかわりに質問といってもいい。何か事物に対して質問を用意することが創造につながるんじゃないか。キザな言い方になりますが、何か精神的なものが自分の中に浮遊していて旅をしているようなところがあるんです。

樺山　今のお話、非常に面白くおききしましたが、私たちの学問の世界でも同じようなことを多分にやっていると思うんです。たとえば私たち歴史家ですと、日本にもし鎖国がなかったらとか、一三四八年にペストが蔓延しなかったらヨーロッパ世界はどうなったかとか、仮の問題を出して考えると意外な側面が見えてくる。つまり遊びに類するところから新しい見方、オリジナルな、クリエイティブな仕事が出てくる側面があるらしく思うのです。

江沢　ぼくも同感だけれども、学問とはやはりシステムをつくるわけで、客観的に堅固に構成されていて、誰がつくっても同じだと思われるかも知れない。たしかに骨組みについてはそうかも知れないが、肉付けとなると各人各様で、そこが面白いところです。物理学でいえば、誰だれの量子力学というぐあいに、それぞれ違った顔や体臭をもった学者の人間的個性と切り離せない側面があります。

個と集団と

樺山　私は京都大学の人文研究所で経験したわけですが、共同作業、共同研究というものの創造的な仕事にとってのメリットというものを考えます。

江沢　ただ、そこにはカリスマ的な存在というものがあって、孤独と抵抗の問題が出てきますね。

杉田　ニーチェは孤独ということが創造者の条件だと言っていますし、その影響を受けたリルケはまさに孤独者です。ジッと一人で考える時間が必要だし、これは共同ではできません。そして社会に対する抵抗に耐える強さですが、そのための知的刺激を与えあうような友人グループはまた必要なんであって、ニーチェ、リルケもその例外ではなかったんです。

芳賀　私も比較文学、比較文化の専攻をしていますが、そこには島田謹二先生というカリスマそのものの先生がおられて、その高温多湿な知的雰囲気に、杉田さんと同様まきこまれて、大洋に漕ぎ出した感じです。当時、学問そのものが星雲状態で、かえってそれが幸いしたように思います。「さあどうぞ、ここで創造性を発揮してください」なんて言われて出来るはずはない。周囲の無理解と抵抗、それらに対するイライラ状況が、かえって自分の中の個性とか創造性を自分で掘りおこす環境をつくってくれたように思います。大体、方法論が解けるようになった学問はすでに死にかけているものなんですよ。

粟津　人間の一生は二万日、多くて二万五千日、それぐらいです、頭のはたらくのは。ですから一生を大事にすること、中でも遊びということ、これこそ人間の一生の中でもっとも大事なものです。それから決断というものも。

野田　遊びが大事だと言われますが、遊びはあくまで無駄だと私は思います。もっとも、研究なども無駄なことですが、にもかかわらず、どうしてもやりたい。それでいいのではないでしょうか。

樺山　日本の社会、日本の文化、あるいは日本人にとって創造性の問題をどうとらえるべきか、私なりに整理して議論の糸口にできればと思います。第一には、日本社会において従来、主流となり権威づけられてきた伝統的、土着的価値観、そうしたものから逸脱したものを将来どの程度許容していくか、いけるかという寛容性の問題。第二には、外側から学び取る文化と自分の中から生得的に耕して出来る文化、言いかえれば外来文化と内発的文化の調和をどう保つかの問題。第三には、日本人の集団埋没型の行動パターンから新しい個性的、創造的行動パターンへの転換の問題。古くして新しい問題です。

教育への疑問

江沢　自分の子どもを見ていて、

（4ページ3段目へ続く）

第113回大学共同セミナー

主題——個性と創造性

——日本の未来のために——

期日——昭和56年1月16～18日

＜ゲスト講演＞

Ⅰ 日本における科学技術とその独創性
東京都立工科短期大学長 渡辺 茂氏

Ⅱ 日本人の創造性
評論家 山本七平氏

＜シンポジウム＞

個性と創造性
グラフィック・デザイナー 粟津 潔氏
学習院大学教授 江沢 洋氏
東京大学教授 大森荘蔵氏
東京大学助教授 樺山紘一氏
武蔵大学助教授 杉田弘子氏
慶応義塾大学教授 中野博司氏
東京大学教授 芳賀 徹氏
東京大学助教授 村上陽一郎氏

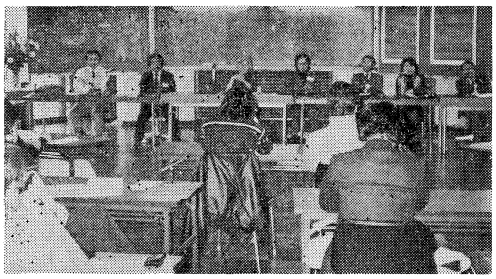
＜講話＞

夢を有形に
名誉館長 飯田宗一郎氏

＜運営委員＞

聖心女子大学教授 岡 宏子氏
東京大学教授 野田春彦氏
慶応義塾大学教授 山岸 健氏

＜参加学生＞52名（内女子16名）
慶大(8)、早大(6)、東大(5)、国際基督教大(4)、東京外大(3)、筑波大、山梨大、津田塾大(各2)、千葉大、東京農工大、横浜国大、名古屋大、大妻女子大、成蹊大、聖心女子大、中央大、東京経済大、東京理科大、立教大、産業能率大(各1)、その他(8)、計20校



シンポジウムの講師——左より芳賀，樺山，岡，村上，中野，杉田，江沢の諸氏

◇

ひとは考える葦であり、膨大な学習力をもつ動物である。しかもその学習力は、既存の文化を習得伝承するだけでなく、それを超えた創造力という機能を発揮することによって、その文化に新しい発展をつけ加えていく、特殊な存在である。だが、この創造の力は、すべての人に共通に与えられた特性なのだろうか。また、能力はありながらそれを発揮させない環境があるのだろうか、等々の問いに発してこのセミナーが企画されたのには、いまの日本において学問、芸術にも、技術、生産に↖

（3ページから続く）

今の教育で果たしてかれらは幸福なのか、疑問を感ずるし、かわいそうな気がします。昔流で言えば一を聞いて十を知る教育に対して今は十を教えて十をテストする。十を教えて三か五を分かればいいんです。しばらく脳を遊ばせておけば、ひとりでに醗酵してやがて二十になる、といった教育が必要です。犬も歩かなければ棒にあたらないのであって、歩く際に多少の模倣があってもいい。他人の歩くように歩いているつもりでも、かならずそこに独創がわいてくるものです。

杉田 私も子どもを二人もっていて、かわいそうだと思う親の一人です。今の小、中、高校教育は一から十までがんじがらめで、大体カリキュラムが高すぎます。これでは自分で考えたり何かする時間がないだろうと思います。外国と比べておよそ一年半は進んでいます。この詰めこみ教育は人間を殺してしまうおそれがあります。子どもをゴウモンにかけるような教育に対して文部省に根本的な再検討をしてほしいと思います。

岡 一年から三年まで、ある小学校で特殊な教育をうけた体験があるのですが、学校へは弁当だけを持っていけばよく、時間割はほとんどが自由、自由、決められた授業が理科、音楽、体育と話し方だけなんです。自分の好きなことをさせながら、自発的な思考の発展をねらっていたようです。一クラス十九人でね、教師は大変だったろうと思いますが、楽しかった。公立でしたが、ああいうこともやれば出来たんです。

芳賀 先日、共通一次の試験監督をしましたが、その問題は本当にすごいですね。カリキュラムの過密さはおどろくべきです。

日本人・日本文化の創造性

芳賀 先程の樺山さんのお話ですが、たしかにこれまでの日本文化について、その模倣性が言われたけれども、大体文化というものは模倣から始まって、その中から少しずつ自分流にアレンジしつつ、自分なりの創造性をつくっているのが普通です。フランス、イタリア、ドイツ、イギリスみな然りです。日本も例外ではないので、徳川時代のあの鎖国の中に、荻生徂徠のような独創的な才能や、三浦梅園のような世界的な哲学者や、従来の模倣から独創へと思想の大転換をなしとげた、かの本居宣長のような人物の、この大きなエネルギーはどこから来たのか。それは一挙に出てきたのではなく、それまでに培われた日本なりの土着の独創性の豊かな基盤があったからです。そこにはニュートンとかガリレオとかアインシュタインとかいう超天才はいなかったかも知れないけれども、樺山さんのいうグループの活躍があったわけです。そこに創造的個性が集まって相互に切磋琢磨し合い、ある程度は相殺し合う面もあったけれども、たとえば農業技術なんか、全く名もない百姓たちが何百年かかって、見事な集約農業の技術を編み出したのです。同じようなことは日本の家屋建築にも言えるので、大工さんの何百年かの努力と工夫の蓄積の上に桂離宮が出来ているわけです。

大森 教育問題など当面いろいろありますけれども、芳賀さんのおっしゃるとおり、日本人なり日本人のエネルギーなりが、いずれはそうした桎梏をはねかえしていくのであって、結論的に申せば、親はなくても子は育つという楽観論を私は持っています。

岡 親はなくても子は育つとおっしゃいましたが、親はあっても子は育つということばもあります。私の好きなことばで、これも逆説的に見えて同じような人間の可能性をあらわすものと思います。

まだまだ議論は尽きませんが、時間も経ちましたので、この辺で終わりたいと思います。皆さんがそれぞれにこの議論の中から何かを醗酵のきっかけとされて、十にも二十にも実らせてくだされば思います。

《追記》五時間をこえたこの討論をどう要約し紹介したらいいか、実のところ大変苦労しました。とくに後半の部分で、創造性を発揮するための心のメカニズムのあり方、学問研究の上でさまざまに体験される方法論的問題、またそれに大きくかかわってくる歴史的、社会的枠組と個性についての考え方、さらに教育の問題と論議が進展し、多岐にわたった部分はこのテーマの重要な論点でありながら、紙面の都合で大きく割愛せざるをえませんでした。諸先生、学生諸氏に感謝するとともに、右の事情につき皆様方のご了承をお願いする次第です。

（文責 編集者）

も、まさに求められている共通の課題がそこにあることへの強い志向が共同セミナー委員会にあったからである。と同時に、このセミナーの一セッションに飯田名誉館長の講話を入れることによって、大学セミナー・ハウス創設にその個性と創造性を傾注して来られた飯田氏への謝意を表したい意図もあって、そんな趣旨から今回はとくに同委員会の正・副委員長が自ら運営委員をかって出てその労をとられたのである。

◇

第一日、開講式につづき渡辺茂氏のゲスト講演が行われ、別掲要旨の紹介に見られるとおり、日本の科学技術が日々当面している現実的課題の中から、創造的発想の可能性をいくつか具体的な形で引き出され、淡々とした口調のあい間に多くの示唆と興味を聴衆に与えてくださった。

今回のセミナーは従来のセクション演習中心の考え方に代えて、指導教授間の討論を中心とするシンポジウムに力点を置いたところに特長があり、その第一部がまず夕刻二時間半にわたり行われ、翌第二日午前中にひきつづき行われた第二部と合わせると実に五時間にも及ぶ大討論会となった。にもかかわらず学生諸君との質疑など、十全を期するにはなお時間不足をきたす結果になったが、ことほどさようにこのテーマの内包する問題が実はたいへん奥行きの深くかつ複雑なものであることを、参加者一同は実感したようである。シンポジウムの概要は上掲のとおりであるが、紙面の都合でその骨組の一部しか紹介できない

エレクトロニクス時代を迎えた現代は、情報が非常な速度で動いている。データ・バンク、データ・ベースと言われるものが急速に進んでいるが、これには三種類あって、その一つは、収集した巨大な情報をコンピューターに入れ、必要な時、必要な情報を取り出すことである。収集の段階にとどまってしまっている日本の現状に対して、アメリカではオペレーション・システム、即ち情報のとりまとめ方、ロジック自体が巨大になっており、将来この質の差は、何らかのかたちで現われてくるだろう。二番目は、光年情報といって、何光年もの彼方から送られてくるものであり、三番目は、ピコ・セカンド（一兆分の一秒）という瞬時に起こる化学変化を測定して収集する情報である。これまで半年や一年もかかった実験結果は、マイクロセンサーの技術により一秒で得られるようになって、アメリカではその技術はすでに確立している。

これらの三つのデータ・ベースは、結局のところビデオに貯えておいて、必要な時に画像にして出すというテレビ文化にすべてつながっていく。非行少年が大きな社会問題となっている昨今であるが、少年たちはお茶の間で世界最先端の知識を得ており、極めて多くの情報量の中にいるのに、教師から聞く話の内容は形骸化し、受験勉強に必要な丸暗記を強いられている。かれらに「学校で無味乾燥な勉強をする必要があるのか」という疑問がわいてくるのは、むしろ当然であろう。

戦後、資源を持たない日本にまず繊維工業が現われ、〝ダラーブラウス〟がアメリカの市場を席巻したが、一度洗うと型崩れをするというので、安いけれど悪い、という日本製品のイメージを生んだ。ところが、日本人は生産の合理化に着目し、品質をそろえ、労働の生産性を高めることに成功した。安くて、性能の良い日本製の自動車やテレビが世界の市場を占めるようになった。それがかれらの反感をかっているが、アメリカ人にとって電気製品は、そもそも親愛なるエジソンがつくったものであって、東洋人がつくっているサギ小屋というより、東京カプセルというべきもので、電化製品の整った宇宙人工衛星のようなものだ。日本人は第一次的によい技術はつくらないかもしれないが、取り入れた技術に日本的な心を入れて小型化している。これも一つの創造であろう。

日本人はまた組み合せを得意としている。神仏合体の信仰もその一例であろう。品種改良によってより良いものを作り、必ず心も一緒に混ぜるのが特徴である。

更にもう一つ指摘すれば、日本人は、非常識なものを本能的に嫌うところがある。これが過去において、よい発明を生まなかった。次のような話がある。紙屋の主が凧に乗って崖から飛び下り大怪我をした。代官は、バカなことはやめておけ、と言って彼を牢屋に入れた。このため、ついに日本では飛行機が発明されなかったと言われている。しかし一度、その非常識が常識になるや否や、日本人はそれを小型化し、組み合せ、心をその中に練り合せることによって、日本独特の技術を築き上げた。

私は昨年、ある新聞紙上にテクノロジー・フィクション（TF）という標題で52の物語を書いた。例えば透明人間のように、想像することに、何かピンとこないものを感じている。由緒ある製品であることは、創造性につながっている。

それでは、日本の技術の創造性は、日本の外にあって、日本人は真似をしているにすぎないのであろうか。日本人の特性の一つとして、伝統的に小型化することを得意としてきたことが指摘できる。朝鮮半島を経て出雲に渡った青竜刀を日本人は薄刃の扱いやすい日本刀につくり変えた。戦後の技術にも影響して自動車や冷蔵庫などに欧米のものとは一味違う小型化志向が見られる。日本の住宅はウ

【ゲスト講演要旨】

日本における科学技術とその独創性

東京都立工科短期大学長
渡辺　茂

ることはできても、実現できる技術はないというのがサイエンス・フィクション（SF）であるのに対して、技術者はやってみたいという夢を持っているのに、社会的に種々の制約があって実現できない、というのがTFである。その物語の中で二つほど紹介しよう。

大都市の交通渋滞を解消するには、道幅を広くして二車線を三車線にすればよいが、実際にはむずかしい。道路をそのままにして、車両の幅を三分の二にすると、二車線を三車線にすることができる。車内が狭くなると、心理的に圧迫を感じるが、高くすることで補うことができよう。問題は大量輸送のトラックやバスがミニカーになると経済効率が悪くなることだ。何台もつなげてトレーラーにすればよいが、線路がないと、前車輪と後車輪が同じ軌道を走れないし、バックがきかないという欠点がある。これを解決するのはマイコン、LSIである。マイコンの発達によって制御技術は二年前より格段に進歩し、踏轍技術も極めて安価にできるのである。

次はマクロ・テクノロジーの話。首都圏にある全部の駅を、一辺が二〇〇米の立方体のビルにしたとしよう。床面積二〇〇米四方の50階建のビルが五〇〇個できる。一階を一〇米ずつ区切ると四〇〇個の部屋ができる。仮に一部屋一人としても50階で二万人。東京にある五〇〇の駅で一千万人が収容できる。ビルの中に会社や官庁もすべておさめれば、あとは緑地帯となって超過密都市と超過疎

（6ページ4段目へ続く）

のは残念である。

第二日午前中でシンポジウムを終え、昼食のあと、中野博司氏によるハイドンの音楽鑑賞が一時間にわたって行われた。シンポジウムですでに論じられた音楽における創造性の秘義を作曲・演奏の実際に即して明かされる中野氏の解説に、参加者一同耳を傾け、しばし疲れた頭脳を休ませる一刻となった。ここで、参加者はそれぞれ希望の三グループ（A江沢・大森先生の組、B杉田・中野・村上先生の組、C樺山・芳賀先生の組）に分かれ、約二時間のグループ別討論に移った。

◇

第二日16時からは一部分、別記「新年の集い」のプログラムと重なって取り進められることになり、本セミナーのゲスト講演、山本七平氏による「日本人の創造性」および飯田名誉館長による講話「夢を有形に」は、セミナー参加者のほか、新年の集いの来賓が加わり、共に聴講の形をとって行われた。

山本七平氏は講演の中で、日本人の創造性を中国、イスラムなどとの対比において、その該博な宗教学・思想史的知識を披瀝しながら解き明かし、東洋随一の創造国、発明国として日本を位置づけられる。とくに新しい創造のための新しい制度の移入・創出に着目すべきだとの観点から、日本古来の歴史的転換点をとりあげ、律令、貞永式目、明治維新、戦後と、それぞれに見られる新しい社会・文化の創出をめざしての外国法制導入等の積極的な意味と役割を説く。また、徳川時代における朱子学の発達が明治以後における欧米文化、とくに自然科学等の移入を容易にしたこと、朱子学の政治思想が維新への革命的刺激を与え、そこにもられた天意民心論は実は戦後民主主義にも通ずる下地をすでに内包していたことなどを具体的に立証された。また、徳川時代にひろく行われた四書等の素読教育にふれ、これがユダヤ人の徹底した暗記教育にも見られるように人類が長い間の経験から編みだした一つの教育方法として今日でも有効ではないかとの見解を、参加者の質問に答えて示され、あとの論議展開への糸口となった。

◇

夕刻、食堂で新年の集いの来賓を交えての交歓夕食会のあと、飯田宗一郎氏の講話「夢を有形に」が一時間半にわたり行われた。紙面の都合からここではとくに印象に残った要旨のいくつかを拾って記すにとどめる。

飯田氏は中で、一つは氏自身が属するクエーカー教会が教育事業に託するその理念に深く啓発されるところがあり、それが後年、大学セミナー・ハウス設立を志す大きな動機になったこと、一言でいえば政治や権力から独立した自由の尊重という基本的理念。一つは人との出合いを大切にすること、人の一生あるいは事業の成否がいかに特定個人との出合いによって決定されるかの自覚。また、人生五十歳までは「らくだ」の時代、学習の時代、その間に得た多くの人びととの信頼関係がすべてのもとでとなったこと。そして、いよいよ一つの理想実現を考える場合、その理想が時代の要求に適合するかどうかの見きわめと決断、さらには私心を棄てた無心の態度が求められること、等々、七十年にわたる人生体験をぶちまけての氏の率直な語り口には氏特有の熱情と感慨がこめられていた。

「人生には詩があり、ロマンがなければならない。新島襄先生は国禁を犯してアメリカに渡り、自らの信念から同志社を興した。そこには政府を背景にし、政府の庇護に頼ることなしの堂々たる生き方があった。落ちこぼれた人間、はじき出された人間による素晴らしい人生の成果を日本の歴史の中に私たちはもっと多く学んでもいい。そこに真に開かれた心を見出し、学んでいきたい」

思うこと多く、ことばにならぬことばで、と謝する飯田氏の結語に対して聴衆からつよい拍手がおくられ、司会の山岸副委員長から心こもる謝辞がおくられた。ここでセミナー参加者は講堂を出てそれぞれのセミナー室での、この日最後のグループ別討論に移った。

◇

明けていよいよ第三日の午前中は全員による全体会・総括討論にあてられた。まず学生代表によるグループ別討論のレポートがABCの順で行われ、ついで参加者全員による質疑応答があり、最後に指導教授による講評でしめくくられた。以下、岡委員長による問題総括を要約しておく。

「種々の論議があったが、大きな焦点として次の三点があげられ、一つは諸領域における創造性の共通性と差違性。創造に至る人間の心理過程では諸領域の差をこえた共通性がある。江沢さんはその過程を理解度と時間との二つの軸で説明されたが、最初の段階の疑いや問題提起から問題解決に至る間のさまざまな形態―パッとひらめく、モタモタする、あたためたり眠ったり、一度は放り出したり―ここは大体どの領域でも同じである。差違は問題解決の段階におこるので、たとえば芸術と物理学の場合ではイメージ思考と言語思考の差があるし、後者では検証が必須なことも大きな違いであるなど。

第二は現代のような情報過多、とくに専門分化の時代に、創造の際にも、手段として既存の情報や理論や前もっての学習の必要性と意味の問題があり、既存の知識体系を詰めこみ、ためこむことの是非が今回も論議の焦点の一つ。

第三は創造性評価や歴史や風土による文化差。日本の創造性を問題にする場合、日本にないものと共に他文化にない独自性も比較評価することが必要なはず―ということか」

（5ページから続く）

都市とが隣り合せとなる。交通地獄は解消するし、安定した建物は地震にも強い。しかし、実現するには、今あるビルを全部つぶさなければならないし、それには22世紀をまたなければならない。

フィクションは人間の歴史にとって極めて重要な意味をもっている。考えてみれば紙幣や通帳はフィクションとしか言いようがないが、すべての人々が本当だと思うから、現実のものになっている。小説に描かれた男女の恋愛は、封建時代の若者に夢を与え、こうして現実のものになった。政治の世界でも一人の熱血漢の辻説法が民衆を動かし、民衆は彼を政治家として育てる。そして法律が施行されて、より良い社会ができ上っていく。後世の人々が当り前と思っていることは、実はフィクションであったものが人間の夢によって絶対にかわることのない約束事になったものである。われわれは、より良い社会をつくるために、フィクションを大事にして、夢を育てていこう。

（文責・編集者）

●寄付金報告

56年3月末現在

＜一般寄付金＞

六、000円　国際基督教大学　都留ゼミ学生一同殿
五、000円　興亜火災海上㈱　事務センターシステム第一課殿
一0、000円　早稲田大学助教授　鴨武彦ゼミ殿
五、000円　東京理科大学　大沢研究室殿
五、000円　鶴見大学教授　井村君江教授殿
二、000円　鶴見大学井村ゼミ　市橋奈津子殿
三、000円　日野協力会　第11回工職長研修会一同殿
七、000円　日本コンピューター・サービスセンター鈴木良五郎殿
五、000円　大沢ビジネスサービス情報システム事業部殿
一0、000円　聖霊カリスマ親交会　吉山宏殿

熱気ただよう「新年の集い」

大学セミナー・ハウスの今日と明日を語る

第113回大学共同セミナー「個性と創造性」の中日にあたる1月17日、来賓68名を迎え、簡素ながら新年の集いが催された。

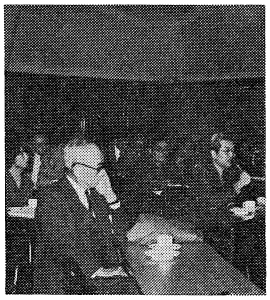
定刻の16時、まず岡委員長より司会の挨拶、今回のセミナー「個性と創造性」が、大学セミナー・ハウス開設以来、その建設と育成に心身を傾倒された飯田宗一郎名誉館長に捧げる意をもこめて企画されたものであり、この機会にハウスの今日と明日を共に考え共に語り合うことができればとの願いから、とくにご縁の深い方がたにこの集いへのご来会をお誘いした趣旨が説明された。

新年交歓夕食会をはさんでの山本七平・飯田宗一郎両氏の講話は別記のとおり、それぞれの個性を発揮して行われ、セミナー参加者と来賓共ども感銘を与えられた。

飯田氏の講話のあと、セミナー参加者はセミナー室に移り、新年の集いへの来会者のみが講堂に残り、プログラム最後の懇談会が始まった。

「大学セミナー・ハウスも開館16年、大きな変動の過程にあるけれども、変動の中にも創設の心を継承・開花させてほしいし、それにはどういうことが要求されるか、皆さんの心の内を明かしていただきたい」との岡委員長の司会により、21時から約一時間半、山内恭彦、色川大吉、戸沼幸市、武者利光ら諸先生はじめ、旧職員、かつて共同セミナーに参加したOBの方がたなど十数人、それに運営委員会から川原栄峰、宇野重昭両氏も加わって、活発な意見の交換が行われた。

「昨年六月理事会での役員人事に関する責任ある経過説明をききたい」「内部事情はあるにせよ、飯田氏が健在なかぎり、その個性と創造性をセミナー・ハウスと共に発揮させてほしい」「問題は職員の置かれている状況にある。職員に働きがい、生きがいをいかにして持たせるかの観点から過去を裁き、将来を切りひらかねば問題は解けない」等々の論議に対して、「こうした問題は然るべき正当な手続きで正当な場で議すべきで懇談会には不適当だ」との声、「千人会員として意思を述べ協議するにも正式の場がない。さしあたり運営委員会、共同セミナー委員会の方がたはぜひここでの話合いの模様を理事会に正確に伝えてほしい」との要望が出され、岡委員長もこれを約され、平静の中にも緊張と熱気をふくんだ懇談は定刻閉会となった。



新年の集い・懇談会の一隅（講堂）

懇談の間、意見の違いは違いとして、大きな観点では大学セミナー・ハウスの健在をねがうこと、そのためには、設立以来の初心を尊重しつつも、その後の時代的状況の変化に即しての体質改善と、その上に立っての新しい協力体制の確立をこそ望む点で、参会者一同の中におおむね共通の了解を認めえたことは幸いであった。

終始、この会の運営に細かい気づかいをいただいた岡・野田・山岸の諸先生、ならびに遠路わざわざご参会いただいた来賓の諸氏と、第113回大学共同セミナーの指導教授と参加学生に心からのお礼を申し述べたい。

〔主な来賓氏名〕（敬称略）

鮎川宗藤　阿久津喜弘　飯尾右一
飯田八千代　色川大吉　宇野重昭
尾形憲　大原洋司　奥繁光　笠井
伍朗　川原栄峰　勝見允行　後藤
聡一　寿岳潤　神保信一　千野熊
男　高峯一愚　富塚文太郎　戸沼
幸市　東条秀光　長松昭男　内藤
正　西勝　原口隆英　藤本紘　松
山正男　松本樺太　松崎義徳　松
村信治郎　武者利光　山内恭彦
行近壮人　山口清隆　芳山邦弘

かくも根源的なもの

第一一三回共同セミナーに参加して

奥村　薫

――時間と空間が宇宙をいれる容器であるごとくに、想像力は生の全体をいれる容器である。想像力なしには、私達の生の一瞬も、死の永劫もなり立たない。――

創造力とはかくも根源的なものであろう。創造性について語る時パンフレットの主題紹介や我々の応募理由で見る様に、いかになせば創造的でありうるか、また個性的でありうるかというアプローチが多いように思える。確かにそれを知ることは多くの人の強い願望であろう。しかし、あのさまざまな分野の教授方の活発なディスカッションを通して、唯一つ形を表わしてきたのは、むしろ逆に意識的に個性的であろうとするほどそれは真の個性とは言いがたいものになるということではなかろうか。かくのごとき矛盾をもったもの。それ自体非常に望ましくめざすべきであり根源的でありながらも、それを直接めざすことによっては到底到達し得ないもの。創造性や個性とは、そのようなものかもしれない。粟津潔氏の作品を、今回ご自身が語りながら数多くスライドで見せていただき、非常に興味深くまた感嘆したのだが、ぽつりぽつりと「これが芸術と言えるのかわかりませんけれど」とか「ただこうやってみたのです」と語られた、その言葉と作品の対比が印象的であった。

もしそのものを目的とすることがそのものにたどりつけないことだとしたら、我々は創造性に対してどのようなアプローチをとればよいのかと悩まずにはいられない。しかしそれは同時にこの世界に生きていることそれ自体が創造ではないかという方向へ議論は向った。となれば創造的であろうとしてその方法論を求めるのではなく、我々のなすべきことは自らの日常、それ自体が創造性豊かな、いや創造そのものであることをより深く自覚し、かつ創造とはそれなしには生の一瞬も、死の永劫も無く、また目の前に向い合う人の意味も見出せないほど重要であることの認識と、その驚きを常に持ち続けることなのではなかろうか。そしていつの日か、自分の内に個性と創造性がゆたかにあふれている時がくることを心のどこかで思いつつ。創造性のための条件も考えない、分野の違いも考えない、それが要求されていることさえも考えずにいきたいと思う。ただ満ち足りぬ魂、それだけを持ち続けて。

（国際基督教大学3年）

三、000円　国際プログラム委員
阿部美哉殿
九、000円　聖心女子大学
進藤トク殿

＜視聴覚施設・設備充実募金＞

五、100円　第112回大学共同セミナー参加学生殿
一〇、七00円　第113回大学共同セミナー参加学生殿
八〇、000円　第113回大学共同セミナー講師一同殿
六、五三円　第1回大学合同セミナー参加学生殿
六、000円　第1回大学合同セミナー指導教授一同殿

＜植樹寄付＞

ヒメコッコウ　早稲田大学助教授
片山覚殿
ヒメコブシ　青山学院大学助教授
小林保彦殿
八重桜苗二本　法政大学伊達秋雄
ゼミ　嶋田宏重殿
斎藤弘子殿
為田高治殿
植樹資金　四、000円
東京大学助教授　増田久弥殿
植樹資金　三、000円
東邦大学生理科学ゼミ
'80代表　吉田光孝殿

第112回大学共同セミナー

主題——生けるサルトル

期日——昭和55年12月12～14日

＜全体講義＞
私の思想経験の中のサルトル
哲学者 竹内芳郎氏

＜ゲスト講演＞
サルトルとボーヴォワール—新しい男と女の関係
作家 三枝和子氏

＜セクション演習＞
A サルトルの思想と文学—いかに読むべきか
立教大学教授 平井啓之氏
B サルトルとマルクス主義
東京経済大学助教授 今村仁司氏
C サルトルと現象学
中央大学教授 木田 元氏
D サルトルの現実参加—文学と現実
一橋大学教授 海老坂武氏

＜運営委員＞
学習院大学教授 白井健三郎氏
海老坂武氏

＜参加学生＞29名（内女子13名）
早大（5）、慶大、日本女子大、東京外大（各3）、東大、明治学院大（各2）、筑波大、一橋大、青山学院大、共立女子大、国際基督教大、駒沢大、上智大、成蹊大、東京経済大、明治大、立教大（各1）計17校

参加者一同——前列右より木田，白井，平井，竹内，海老坂，今村の諸先生

◇

この年、一九八〇年の4月、七五年の生涯を閉じたフランスの思想家・文学者サルトルを軸として現代を考える本セミナーの当初の企画者は、共同セミナー委員会の委員、学習院大学教授で哲学専攻の故小松茂夫氏である。小松氏は不幸にして中途病没され、代わって同じ大学のフランス文学の教授白井健三郎氏と一橋大学教授海老坂武氏が運営委員の役をお引受け下さり、実現のはこびとなった。学問を愛し、平和と人権の思想を真摯に求めて生涯を終えた小松氏への鎮魂にふさわしいセミナーとなった。

文学、哲学、政治、社会の諸分野にわたり創作、批評、市民運動等、多面多彩な活動をつづけたサルトルをどうとらえるか、企画段階で論議の末、上記のような内容になった。参加者はかならずしも多くなかったが、戦後日本の思想形成に抜きがたい影響をあたえた、まさに現代史の生き証人として、格闘に値する思想家サルトルと取り組むことを通じて、包み切れぬ問題意識と真実探求への心の灯をともされた感激は、参加者共通のものであったのではなかろうか。

◇

第一日目は開講式のあと、三枝和子氏のゲスト講演から始められた。サルトルとボーヴォワール、この二つの個性の組み合わせにひそむ男と女の特殊であり普遍である関係をどう解くか。関西学院大学で哲学科を選んだころからの三枝氏自身の人生経験をふまえてのその間の分析・批評には作家特有のするどい知的嗅覚から、耳目をひかずにはおかない示唆があった。

三枝氏の見るところ、この二人の関係はまさに古典的知識人としての男女一対の関係であって、自己と他者との関係から本質を見つめようとつとめながらも、つまるところ男と女の共通性を見つけることからはじめようとする。が、その立場は余りにも古典的で、そこに無理があるのではあるまいか。男の論理と女の論理とは根本的にちがうのであって、その違いたるや、相互理解不可能に近いものだ。女には男と別の経路から出てくることばがあるのであって、そこの関係を直視しないと欺瞞におちいる。ボーヴォワールは賢夫人すぎたため、そこには、「男の論理をどこまで理解できるか」の発想はあるけれども、「女」自身の声がない。言いかえれば、ボーヴォワールのもつそうした理解の度合いで女を尊敬することはあっても、自分には全然考えつかぬような次元の発想をしてくれる者として女を見る眼がサルトルには開かれていなかった。ボーヴォワールはつまりは男の文化の中にいたのであり、サルトルは彼女から「女」の声をついに聞くことはなかった、というのである。この代表的知識人夫妻に対する敬意をこめての批判である。

論のおもむくところ、有史以来の男中心の文化、対立と闘争、殺し合いの文化に代わって、いまや産む性イコール女の論理を基にした文化へと新しい革命を説く三枝氏は、冒頭早くもこれから始まるセクション演習に熱っぽい討論の火をともすことになった。

◇

第一日夕刻後と第二日午前のセクション演習Ⅰ・Ⅱのあとをうけて、午後の約二時間にわたり、竹内芳郎氏の全体講義が行われた。

戦争末期に学生服を軍服に替え中国に渡ってやがて終戦、捕虜、そして復員しての大学生活、そこでの荒廃と不信の中ではじめて読んだサルトルとの出合いの思い出を語る竹内氏の口吻には今なお忘れやらぬ青春への複雑な感慨がこめられ、聴衆の心に訴えるものがあった。参加者との質疑応答を交えての二時間、そこにはますます伝達不能の度を深めつつある戦後体験とその間の思想的営為の大要を、なんとか伝達可能にしようとする緊張した雰囲気がみなぎり、それはティー・タイムをはさみ、つぎのインター・セクションにひきつがれた。竹内氏の講義の要旨は別掲のとおりである。

インター・セクションのはじめに白井健三郎氏から前日来のセクション演習参加の労をねぎらうことばがあったのち、各指導教授からいわばその中間報告がなされた。

平井啓之氏はサルトルの文学と思想を、ルソーからヴァレリイに至るフランス近代文学、思想を受けついだ、きわめて正統的な性格のものであり、人間に関する問いの総決算であるとする。すなわち第三共和制下のフランス・ブルジョア文化の中の人間のゆがみ、たてまえとしてのヒューマニズムと本音との間の差違について、インテリゲンチアとしての責任をとることを自らの生涯の仕事に課した、いわば第三共和制の最後をかざる知的作業だと見る。一見、試行錯誤のくりかえしであり、手さぐりの仕事であるところに、かえってサルトルの真骨頂があるのであり、読者はサルトルの中に安易に答えを求めることをやめて、虚心にテキストに当たることをすすめられる。

今村仁司氏はサルトルが『弁証法的理性批判』で提起したマルクス主義批判はいまなお有効であるとし、マルクス主義はもう一度サルトルの問いを再考し、新しい社会科学への展望を切りひらいて努力をしなければならぬと説く。現代マルクス主義の思想的枯渇を救い再生させるための当面の課題として①科学的精神の回復、②社会における個人の生の問題の二つをあげ、アルチュセールの文献などを手がかりにして考えていこうと言われる。

〔全体講義要旨〕

私の思想経験の中のサルトル

哲学者　竹内　芳郎

私はいわゆる戦争世代に属する者だが、私の青春期の思索形成にとってサルトルは決定的な意味をもった。私がサルトルとどうかかわっていったかをお話することによって、純粋に戦後世代に属するあなた方との間に、直接的な形では伝達できない体験の交換ができるのじゃないか。その際諸君とどこが違うか、その違いに着目して、いわば異化作用を媒介として体験の交換をはかることがのぞましいと思う。

＊

1　実存主義者としてのサルトル

私は大学を卒業するころ、一九五二年の日記にこう書いている。

「一方ではなまなましく吐息するこのいのち、他方ではあらがねのような非情な論理体系、この相反する二つのものが完全に融合したとき、ぼくは満足する。」

たしかに私は、戦争と敗戦の体験を通して、あのころ二重の性格をおびた思想を追求していた。一方では生活と思索の結合、生活者の哲学、実存すること自体の哲学。他方では具体的な生に埋没するのでなく、それを批判的に再構成し、明晰化するような理論。日本の現実との対決において、もっとも特徴的な、いわゆる実感信仰と理論信仰との、バラバラでありながらかつ微妙な共存のあり方。——そういうものと対決し克服するものを求めていたとき、サルトルの『存在と無』との出合いはおどろきであり、まさにそうした二重性格を内蔵した現象学は私にとってたまらない魅力としてうつった。

2　コギトの問題

サルトルにとって「コギト」とは何か。かれの哲学は自由の哲学といわれるけれども、自由イコール自我といった近代哲学共通の自我主義的公式を、共同主観といった無責任な匿名性に逃げこむことなく破砕し、つねに世界に向かって開かれた地平を志向するところに基本があった。どんなに密室にこもろうが、われわれは社会的存在でしかない。にもかかわらず、われわれの生をうけてから死ぬまでの一連の経験の連続性というものは、他人の経験には絶対に還元できないものだ。そこに人間を社会関係の束、社会的連関の中に解消しようとする旧マルクス主義や構造主義的思考との距りもまた生まれてくる。

結局、サルトルにとっての「コギト」は、生きられた次元と客観的理論とのいわば変換式を成立させるような、そういう方法論的装置であって、そこからサルトルのマルクス主義への独得の接近の仕方が形成されていると私は思う。

3　他者の問題

『存在と無』で一番おもしろかったのは他者の問題だ。従来の近代哲学は結局、独我論だといわれることがあるが、独我論を主張した哲学はありえない。にもかかわらず、他者の問題をサルトルほどあざやかに、具体的関係、とくに性的関係にまで立ち及んで、理論的立場から明確な解明をしたものはいまだかつてなかった。

「地獄とは他者のことだ」——このことばは、たとえば和辻哲郎の『人間の学としての倫理学』に代表されるような日本人のなれ合い的な人間関係の見方に比べて、おどろくべき破壊性をもっている。人間関係の真の意味は他者との出合い、お互いの違いの自覚、そして他者との相剋を通して、自分も変わり、他者も変えていくことによって、他者とともに自由になる。言いかえれば各人が己れの対他存在をどう引き受けるか、そこに人間の自由があるとする。これは自己への誠実という自我主義的モラル観への大変な破壊といえる。ただし、相剋を通してあらわにされる共同性の存在証明においてサルトルにもなお弱さはあるけれども。

4　サルトルとマルクス主義

日本では反マルクス主義として実存主義が流行したが、サルトルの実存主義はむしろ反マルクス主義で、そこに魅力があった。マルクス主義に見られる理論信仰と実存主義に見られる実感信仰と、そこに対立を見るのでなく、むしろ理論への実感のかかわり方の大事さを教えてくれたのがサルトルの実存主義であり、その延長線上に生まれたのが『弁証法的理性批判』なのだ。そこではブルジョア的思惟と官許マルクス的思惟の同時超克、唯物史観の再構成が当然意図されていたと思われる。

5　私のサルトル観

私は現在サルトルから離れている。サルトルでは解けない問題をいろいろ感じ考えるようになったからだ。サルトルはマルクス主義を克服不可能な現代唯一の真理体系だと言っているが、この考えは今では通用しない。マルクス主義に領導された社会主義は破産しつつあるし、マルクス主義の根底にある近代的歴史観の再検討が必要だ。未開と文明、都市と農村、共同体の復権、その他新しい観点からの問題認識、文明転換の課題認識がわれわれに求められている。以下、サルトル的マルクス主義の欠陥と思われるものをあげれば、①自然弁証法に対する無理解。近代科学の方法的革新の必要への盲目。②歴史なき社会の歴史への積分の不十分さ。③人間中心主義の限界。人間への即自的肯定の構えからは人類の未来は開かれないことの無自覚。④人間文化の総体を基底から洗いなおす必要。

以上、私にとってのサルトルを思いのままぶちまけたが、それにもかかわらず、現代の証人としてサルトルほどめざましい証人はほかにいなかったと思うし、サルトルとの対決なくして現代を思索することはありえぬだろうと今でも私は思っている。

（文責・編集者）

つぎに木田元氏は、自然環境とのかかわり合いの中でまるごと人間を見ていこうとするのがまさに現象学であり、一九三〇年代以後それのフランスへの移植を試みたサルトルやメルロ・ポンティの役割を『情緒論粗描』を手がかりに検討しようとするセクションの意図を説く。ただ、サルトルの場合、「自然」というものを根本から考えなおそうとする現象学の究極の目標からいえば、なお人間中心主義にとどまるところがあり、そこに限界を感ぜざるをえないとされる。

最後に海老坂武氏はアンガージュマン（現実参加）に二つの側面——一つは文学としてのそれと、一つは文学者としてのそれ——があることを述べ、それを作品『アルトナの幽閉者』をテキストに検証しようとの意図を説く。さらにはサルトルから何を学んだか、の自らの設問に対してつぎの四つをあげて説明された。①他者の重要性、そして異化から友愛への道筋の教示、②自己完結を求めない姿勢、例として未刊のままに終わった数多くの主著、たえず自己、自らの思想をぶちこわす前進性、③拒否の精神、例えばノーベル賞、受け入れない思想とは一線を画すことによる自由の確保、④恵まれない立場から人間を見る視点、例えばジャン・ジュネ、ベトナム反戦、ボート・ピープル等への対応。

◇

四つの部屋に分かれてのセクション演習は第二日の深更から第三日の明け方にかけて、延々とつづ

（10ページ4段目へ続く）

●事業部だより

55年12月、56年1・2・3月
冬から春への合宿状況

●12月――交流の季節

例年のように、冬休み開始前後には各大学の合宿が多い。同月利用のグループ数は一〇七、宿泊延人数は三、四八二人（定員比四八%）。このうち会員校大学は八〇グループ二、一八〇人（構成比六三%）、非会員校大学と合わせると九四グループ三、〇五五人同八八%）で、大学共同体にふさわしい利用形態。卒論・修論の中間発表と討論を目的とする合宿の多いのが特徴である。また、年末にかけては、この季節の〝常連〟グループを多く迎えることができるので、ハウスは一層心のかよい合う生活の場となる。今年もクリスマス交歓会や餅つき大会など交流・親睦の機会が設けられた。そのような時節に、今年当ハウスは大きな研究集会の開催を迎えることができた。文部省科学研究費による「中東の社会変化とイスラム」共同研究集会（事務局・国立民族学博物館）で、同集会の運営の衝に当たられ、当ハウスでの開催を積極的に推進して下さった東大助教授・板垣雄三氏（当ハウス共同セミナー委員）、津田塾大教授・片倉もとこ氏（共同セミナー「イスラムの世界」の指導教授）など当ハウス関係者を含む全国各大学等からのイスラム研究者約六〇名が参加された。

以下、同月の交歓諸行事などを拾って点描してみると――

12月6日＝夕食時に一一グループ二一三名が交流。各グループの紹介に続いて青山学院大・清水英夫教授がスピーチされた。同日、総会と研究発表を兼ねて一泊の日本生活学会には日本女子大・一番ケ瀬康子教授他の大学関係者や建築評論家・川添登氏など各界専門家、計約五〇名が参加されたが、来館されるはずの同学会会長・吉阪隆正教授はご病気で欠席（そして吉阪教授はこれより一〇日後の同月17日に逝去された）。

12月13日＝第112回共同セミナーを含む七グループ二二〇名が夕食時に交歓。同セミナーの運営委員、一橋大・海老坂武教授がスピーチ。明大・山野ゼミと日本国際連合学生連盟の慶大グループが、それぞれ校歌等の合唱を披露。

12月20日＝夜9時30分から講堂で行われたクリスマス交歓会に九グループ二〇〇名が参加。グループ紹介、夜食のあと、昨年同様古典楽器を演奏してくれた「フリッソン」（49年開催・共同セミナー「芸術のたのしみ」Dセクションの集い）など各グループからの出しものあり、最後のキャンドル・サービスでは東経大・色川大吉教授の親火からともされた灯火の輪の中で、前記板垣雄三氏が感話をのべられた。なお、在泊者より寄せられたクリスマス献金計四万二、八九五円は、例年のように日本心身障害児協会・島田療育園に届けられた。

12月26日＝昼食時をはさんで恒例の餅つき大会が構内の民家・遠来荘で行われ、在泊の五グループ一八三名と当ハウス職員が参加。日本女子大・シェイクスピアドラマゼミや国際経済商学学生協会（アイセック）などの参加学生も交互に杵をとり、つき立ての餅に年の瀬の情緒を味わった。

12月28日＝一九八〇年最後（ご用納め28日午前まで）の利用グループは――全国二三大学より一三五名が参加した前記アイセック、「文教研」、東京学芸大主体のITC（英会話訓練）、そして府中療育センターの四グループ計二〇〇名であった。

●1・2月――立春とともに再び活気

例年1月は、各大学の学年末試験をまえに、大学関係者の利用率がぐっと低下する。今年も同月はグループ数五二、宿泊延人数一、三七三人（定員比二〇%）と年間を通して最低の利用率。しかし、2月、文字通り〝立春〟の声とともに、当ハウスに活気が戻る。先に試験を終えた私立大グループのゼミ合宿が再開され、また学年末に向けてクラブ活動やサークル等の集会がこれに加わるからである。2月のグループ数は一二五、宿泊延人数は四、七三八人（定員比六三%）と今年は予想を上廻る活況を見せた。同月の利用者が四、〇〇〇人を越えたのも開館以来初めてのことである。

1月6日＝一九八一年の初利用は同日午後入館の学習院大・岡本ゼミ、立大・加藤ゼミ、立大・大学院法学研究会、芝浦工大・高橋清教授、これに社会人グループ一

（9ページから続く）

いたグループもあり、第三日午前の全体集会に集まる学生の中には目を赤くした者も散見するという、いつもながらの情景があった。

全体集会は学生議長団の司会でまず各セクションの代表学生による総括報告のあと、指導教授をふくめての参加者全員による質疑と討論、最後に教授による講評で幕を閉じた。以下はそこで出された論点のいくつかである。

問 サルトルの他者に対する共感能力というか想像力というか、そういう説明があったが、それをもう少し具体的に……。

海老坂氏――自分と全く異質といっていいものに対する理解力はすぐれている。たとえばジャン・ジュネについて、第三世界についてなど、この種の発言は多いが、これにはやはり想像力が必要で、個人、他民族を理解する方法、装置を精密につくり上げた人といえるだろう。

問 もともと文学とは密室における孤独な作業という面がある。それとアンガージュマンとはどんなかかわりをもつのか。

白井氏――書くことはすなわちことばをつかうこと、ことば自体が社会化されている。また、書くことは他人に対する言語表現であって、立派なアンガージュマンになるし、そこに責任というものが出てくると思う。それと、より直接的に自分を疎外する状況に対してなま身の人間として拒否し抵抗することは別のあり方で、われわれ教師の立場にもつねにこの二つが並存すると私は思う。

問 『嘔吐』時代のサルトルには多分に、ある虚無思想があるように見られるが……。

平井氏――プルースト、ヴァレリイ、ベルグソンなどと共通に、第三共和制末期のいわば美的文化意識の極限に立ち、しかもそれを乗りこえんとして乗りこえ得ない深いメランコリーがたしかにあった。これは戦後のサルトルの文学、思想とは明らかに違った傾向といえる。

問 マルクス主義の思想的枯渇を救うものは何か、サルトルから何を学ぶか。

今村氏――現実に枯渇がないとはいえないが、サルトル以後、思想的、理論的にも多様化し、再生の方向に向かっている。現に欧米ではマル転（マルクスへの転向）現象がおきている。ただし、再生のためには着実な科学精神の新しい建設作業が必要で、それを無視した社会科学は死に至るだろう。

問 サルトルの倫理観、中でも人間の自由と責任の問題について。

海老坂氏――サルトルの場合、倫理というものを自分一個の自由の立場からでなく、周囲の他人の立場から考えている。最初、自由を突破口として上からの抑圧をはねのけようとする構えだったものから、最後には横に対する関係の中で、サルトルのいう「友愛」の関係の中で自由というものを考えるに至る、その間の自己変革の過程は教訓的だと私は思う。

*

*　*

を加えて五グループ計八二名。翌7日昼食には七草粥が供された。

1月13日＝新春恒例の東京神学大主催・教職セミナーには全国各地からの牧師、院生、そして同大教職員など計八三名が参加したが、この日は交友館でのお茶に全員を招待。席上、大木英夫学長と飯田名誉館長がそれぞれあいさつされた。

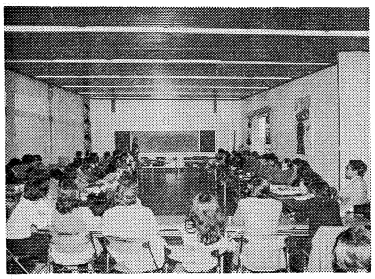
1月18日＝第113回共同セミナー「個性と創造性」の送別昼食会の席上、今春新たに〝成人〟となった参加者男女八名を祝福、当ハウスから記念品が贈られた。

1月24日＝週末の夕食時に五グループ一二〇名を紹介。席上、日本山岳協会主催・海外登山技術研究会に参加された電気通信大・芳野赳夫教授から第七次南極観測越冬隊長としての体験の一端をご披露いただいた。

2月3日＝節分の飾りつけが付された食堂で、上智大・磯見ゼミなど三グループにセミナー室での豆まき兼おやつ用の〝節分の豆〟が供された。

2月10日＝夕食時の食堂で在泊一二グループ二五五名を紹介。東京女子大ボランティア・サークル「ゆびっこ」の代表が同大近くの子供会への奉仕活動について報告。14日の週末にも七グループ一六〇名が夕食時に交流。明治学院大グリー・クラブの美しい合唱、地元の奉仕者・横内和代さん（ピアノ教師）の見事なピアノ演奏などが披露された。

2月21日＝この週末、いずれも会員校の東京理科大、都立大、東京女子大三校の人間関係（エンカウンター）グループがそろって合宿。夕食時にそれぞれを紹介。翌22日に開かれた本年最初の遠来荘茶道教室（奉仕者・田所光子氏他）には、これら人間関係ゼミから計四六名が参加した。



東大大学院・春の合宿セミナー
（大学院セミナー館）

●3月――学年末・一年間の総括、そして春休み

学年末は、ゼミナールにとってもサークルにとっても〝一年間の総括〟の時期。通常は一～二泊の合宿も、この月には二～三泊が圧倒的に多くなる。そして同月後半、各大学の学生はそれぞれの大学の所属をはなれて、語学研修など春休みの諸集会のメンバーとして来館する。「すべてフランス語だけ」で八泊する語学教育振興会（COLTD）主催の仏語セミナーには一六大学からの教師・学生計三七名が、当ハウスも「協賛」の大学院仏語セミナーには八大学一六名が参加。また、第1回大学合同セミナー「現代家族と生活意識」（当ハウス主催）には九大学、大学院レベルの「現象学的社会学研究会」には東西一〇大学、代数学ゼミナールには六大学、さらにお茶の水教会学生クリスチャンセミナーにも数大学の学生が参加している。この月の利用グループは一〇九、宿泊延人員は五、八七二人（定員比七〇％）を数えた。この利用者数は3月の最多記録、また同月の利用者が8月に次いで年度内二番目に多いのも初めてのことである。ここで因みに、当ハウスのこの一年間の利用状況を数字の上で〝総括〟すれば（カッコ内は前年度）――グループ数一、一八七（一、二〇〇）、実人数三万二、二一二人（三万一、〇二三人）、宿泊延人数五万五、六〇八人（五万三、四三七人）となる。このように、本年度もまた前年度につくられた最多記録を更新して〝年度越し〟ができることを、ご利用いただいたお一人お一人に感謝して、ご報告申し上げたい。

毎年3月もなかばを過ぎる頃、お馴染みの先生方と五〇人ほどの学生の一群を、きまってこの丘に迎える。当ハウスにご縁の深い佐伯彰一、芳賀徹、平川祐弘、小堀桂一郎各氏など東大教養学部の諸先生が中心になって運営されている「比較文学・比較文化」の春の合宿セミナーである。昭和44年以来の連続開催であるから、今年でもう一三回目になる。プログラムの中心となっている修士論文の研究発表と討論は〝一年間の総仕上げ〟でもあり、同時に新入大学院生への〝オリエンテーション〟ともなる。そして今回も計五七名の中には韓国、カナダ、米国、イタリア、英国など五ヵ国からの留学生・研究者八名が参加しているので、文字通り〝異文化間交流〟を体験する場となり、さらに年に一度学年末に在校生・卒業生・研究者が再び会して学術的・人間的交

◆わたしたちの合宿◆
十三年目の春の行事
東大大学院
＜比較文学・比較文化＞

東京大学教授　小堀桂一郎

端緒は昭和四十四年の早春のことだった。前年の夏に始まった全国的な学園紛争が次第に激しくなつて各地の大学でいはゆる封鎖とか校舎占拠といふ事態が生ずるやうになつた。東京大学もその例に洩れず、教室が使用できなくなつたので、大学セミナー・ハウスのお世話になり、三月の休みに合宿といふ形で遅れてゐた勉強の取返しをつけることにした。これを実行してみると諸事大へん工合がよい。そこで大学内の秩序が正常に復した翌年の春にも同様な合宿を行なひ、これが例年の事となり、本年で満十二年、度数では第十三回めを数へることとなつた。

この合宿を主宰する責任者は、教官側、公式には専門課程主任教授といふことになるが、実質的には助手の指導によつて学生が運営の実務に当り、教官は研究の面で相談にあづかるだけである。時期が三月で、恰度大学院の入学試験が終り、新入学生の顔ぶれも決つた頃であるから、合宿の性格・目標も、自づから新入学生のための研究指導・入門セミナーとでも称すべきものになつてきた。新入生は原則として全員参加するが、彼等と顔合せのため在学生の大半もこれに加はる。更に卒業生も、今は教育研究職に就き、地方に在住する先輩達が、むしろこの機会を楽しみに、昔馴染みの多摩の丘上へ集つてくるのであるから、この合宿は一面同窓会の趣きがあり、かつ共通の話題は結局は各自専攻の学生が中心なのだから、他面小規模の学会の如き観を呈することにもなる。

というのは、この合宿は授業の延長や補足ではなくて、研究発表会なのである。主としてその春に修士学位論文を完成した学生がその要旨を口頭で発表し、先輩達から遠慮会釈ない厳しい批判を浴びたり、或ひは後輩である在学生からも鋭い質問を受けてたちろぐ場面もあるわけで、新入の学生はかうした空気を経験することによつて、研究主題への取り組み方、論述の方法の巧拙などを、実感を以て、何となく会得する様な方向に導かれるのである。

もう一つの特色は、これは合宿の、といふよりは本専門課程自体の特殊性であらうが、外国人留学生・研究生・客員教授等の数の多いことである。参加者の一割がアジア諸国や欧米各国から日本に勉学に来てゐる若い男女の学生である。そしてこの合宿を通じて国際的な友情の関係が成立し、同時にそこで一種の文化摩擦をも経験するといふことが、外国人学生にとつてのみならず、邦人学生にとつても、学業上の啓発に勝るとも劣らない貴重な収穫なのである。

（12ページ5段目へ続く）

吉阪隆正先生追悼

——思い出は多摩の丘に——

大学セミナー・ハウス名誉館長 飯田宗一郎

私にとって吉阪隆正先生を追憶することは人間の出会いの意味を書くことであり、創造のたのしみを回想することである。未来を占うような意見をもって、共に語ることのできた得難い善友であったというひとことにつきるのである。こちらから求めて吉阪先生と接触する動機は全くなかったのであるが、五十にして天命を知った私の眼の前に、建築家吉阪隆正が現われたのである。一九六二年11月19日、早稲田大学学長大浜信泉先生のご紹介で初対面をしたのが、縁をつくる発端であった。

体験を前提として現実の中から問題を引き出すのが私の発想法である。したがって理論的というよりは感性的である。戦後発足した新制大学の中で私は大学人としての修業をつんだ。私学の経営と教学のために長い年月を過ごした。日本の大学は量的な発展をしたが、質的には大衆化が進み、世論の中でマスプロ教育の弊害が論じられるようになった。このような状況と体験を背景にして、大学セミナー・ハウスなるものの構想が私の心の中に浮び上がった。

どんな立派な構想でも、実行に移すことができなければ、ただの意見に終ってしまうのである。日本には折角のよい意見があっても実現に結びつけていく社会的慣習が育っていない。この点でも大学セミナー・ハウスが現在多摩の丘に建っていることは、稀な事例ではあるまいか。

実現には資金が必要である。私はやみがたい使命感にかられて、財界人の中から募金の主役を引きうけて下さる方を広く深く物色した。三井銀行会長佐藤喜一郎氏に白羽の矢をたてるまでに2年の歳月を要した。この財界の大物に出会うことができたことの幸運については、どんなに感謝しても感謝しきれるものではない。一九六一年7月21日の三井銀行会長室での語り合いは、いまもなお忘れ難い印象である。

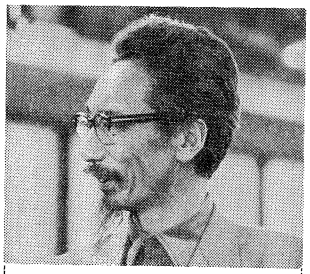
ゼミナールの小集団を教育の単位として合宿研修をすること、国公私の大学が共同してセミナーを行なうこと、そして「開かれた大学」を目指す大学セミナー・ハウスには高い理念がある。その理念を有形にするのが建築である。どなたに設計を依頼するかは、この施設の運命にかかわる重要な問題であった。大浜信泉先生は、いちはやくセミナー・ハウスの建設を支持して下さった人である。私がこの人に推薦を仰いだ理由である。

お互いに自己の思想を主張する個性の強い人間である。論ずることは闘いであったが、心を割ることはなかった。「いまここで」求められているものについて論議する日々がつづいた。一緒になって対象を見極めようとするグループができた。松崎義徳氏を初めとする若い設計者がU研究室にいたからである。いつしか、大学セミナー・ハウスを考える「小さな世界」が形づくられた。

私には、心のどこかに秘かなイメージがあった。唐招提寺の金堂、講堂、礼堂、鼓楼などの配置には意味がある。ノートル・ダム大聖堂は、ひとつの建物にすべてをまとめてある。建設地と決めた多摩の丘は、なだらかではあるが、大きな建物を建てるだけの広さがない。丘をけずって広い場所をつくることは自然を破壊することになる。地形を生かし、大小の建物を機能別に建てる唐招提寺方式がよい。一度に多額の建設資金を寄付に仰ぐことは無理である。まずマスタープランをつくってもらった。年を追って時代の要求に即応した建物が建った。一九七九年9月の『建築文化』の特集・大学セミナー・ハウス'65〜'78が、このことの成果をよく紹介している。

当時の野猿街道は道幅も狭く味わいの深い静かな道であった。旧中山部落には素朴な民家が点在していた。その後急速に都市化の波が押しよせて来て多摩の丘はすっかり変貌してしまった。それでも植樹に努めたかいがあって、「セミナーの丘」は大小さまざまの樹木がよく成長し、いまは立派な森になっている。セミナーに参加する人びとの心をなごませる美しいキャンパスができたのも、理念にふさわしい建築群があるためである。

学生たちは丘をのぼると正面に聳える奇妙な建物を仰ぐのである。それがクサビ型の本館である。偉観である。人はまず吉阪隆正の建築に接して驚嘆する。講堂、図書館、教師館、長期セミナー館、大学院セミナー館、国際セミナー館、交友館には一貫した思索の態度がある。どこかに人間の匂いが漂っている。「他はこれ我にあらず」とは道元の言葉である。吉阪隆正は個性をもってそれを発揮した建築家である。幅広い体験と交友、度々の海外生活が結実したのが人間吉阪隆正であったのであろう。現実への鋭い認識を有形化したのが吉阪建築のフォーラムなのであろう。なお地上におきたい人であった。惜しい人が早く世を去った。時は流れても、思い出は長く生きつづけるであろう。



昨年12月17日、早稲田大学工学部建築学科教授吉阪隆正氏が逝去された。氏は一九一七年東京に、生まれ、一九四一年早大建築学科卒業。以後日本建築学会、日本生活学会、日本山岳会等々、その多彩かつ独創的な活動は広く、今や国際的にも著名である。大学セミナー・ハウス構内の建築は、すべて氏を主領とするU研究室の設計に成り、ハウスにとり氏はまさに生みの親の一人である。ここに飯田名誉館長の一文をかかげ、謹んで先生の霊に謝する次第である。（編集者）

（11ページから続く）

流を深める機会ともなる。本号の「わたしたちの合宿」紹介では、この異色ある合宿セミナーにご登場願い、学年末でご多忙の小堀先生を煩わして別掲の一文をお寄せいただくことができた。

3月7日＝当ハウス「学生年輪の会」恒例の〝春のつどい〟が開催され、一五大学一九名、社会人二名、計二一名が参加。〝卒業生を送る会〟として昨年同様卒論研究の発表を中心に交流。今春卒業の会員八名には当ハウスから記念品が贈られた。

3月14日＝夕食時に九グループ二〇七名が交流。文化事業協会（ICA）主催のシンポジウムに導入の「問題解決動機づけの新手法」を参加者・柴田祐作氏（日立製作所勤務）が紹介し、同様のプログラムでの「大学人と社会人との交流」を提唱された。

3月22日＝ゼミ合宿で三泊の千人会員・小林保彦氏（青山学院大助教授）が、今春幼稚園に行く令息・翼君が「成長してセミナー・ハウスに来ることを願って」、持参の「姫こぶし」を記念植樹された。

3月29日＝法大・伊達秋雄ゼミOBの為田高治氏他二名が八重桜の苗木を持参、第5宿舎群下斜面に記念の植樹をされ、中川新館長もこれに加わった。また、同日午後は第4日曜恒例の茶道教室（奉仕者・矢内宗紫先生他三名）が開催されたが、これには駒沢大・谷敷正光ゼミ全員の六〇名、ELEC セミナー外国人講師など計七三名が参加、構内の民家・遠来荘は大変な賑わいを見せた。

法人ニュース

第44回理事会・第27回評議員会

昭和56年2月3日／私学会館

▼役員・評議員人事
▼協力会員校会費改訂案
▼準協力会員校制実施案
▼開館十五周年記念募金計画案

【出席者】
＜理事＞茅誠司、飯田宗一郎、川喜田愛郎、村井資長、加藤一郎、中村哲、沼田稲次郎、小谷正雄、小山五郎（代理河村綱也）、中川秀恭、岡山猛
＜監事＞平島正喜
＜評議員＞川原栄峰、鈴木皇、加藤一郎、内藤正、三宅彰、小川芳男、村山松雄、鈴木勝（代理坂井健一）、石川馨、山辺武郎
委任状による者　理事13名、評議員64名

＊

理事会・評議員会合同会議のため、評議員会の議案については中村哲氏が議長となり審議が進められた。役員・評議員人事については茅理事長から提案説明、あとは岡山専務理事より逐次説明があり、それぞれ質疑応答ののち、賛成多数で可決承認された。

▼役員・評議員人事について

これまで茅理事長が兼務されてきた館長職に国際基督教大学長中川秀恭氏（現監事）、監事に東京女子大学長隅谷三喜男氏がそれぞれ前任者の残任期間就任されること、その前提として中川氏の理事新任と上智大学長ヨゼフ・ピタウ氏の学長辞任による理事退任が承認された。

また新学長就任に伴う評議員の交替として、明治大学長山本進一氏の新任（麻生平八郎氏の退任）、津田塾大学長大東百合子氏の新任（中島文雄氏の退任）が承認された。

▼協力会員校会費増額について

昭和56年度の協力会員校会費は基本会費三五万円（従来二五万円）、学部会費二〇万円（従来一五万円）に決定。

▼準協力会員校制実施について

大学セミナー・ハウスの設立目的および事業に賛同する短期大学もしくはこれに準ずる学校法人に対して、昭和56年度より準協力会員校（年会費二〇万円）として運営参加ならびに施設利用の機会を提供することに決定。

▼開館十五周年記念募金について

常務理事会において審議、検討中の募金案（詳しくは後日記載）が中間報告され、その具体化にあたっては常務理事会が募金委員会にもはかり取り決めることに一任された。

第45回理事会・第28回評議員会

昭和56年3月30日／私学会館

▼評議員人事
▼昭和56年度事業計画案
▼昭和56年度収支予算案

【出席者】
＜理事＞茅誠司、飯田宗一郎、川喜田愛郎、村井資長、加藤一郎、中村哲、沼田稲次郎、中川秀恭、永井道雄、坂本是忠、岡山猛
＜監事＞隅谷三喜男
＜顧問＞加藤六美
＜評議員＞村山松雄、三宅彰、大東百合子
委任状による者　理事9名、評議員68名

＊

理事会・評議員会合同会議のため、評議員会の議案については中村哲氏が議長となり審議が進められた。評議員人事については茅理事長から、その他は岡山専務理事から逐次説明があり、それぞれ質疑応答ののち、賛成多数で可決承認された。

▼評議員人事について

長らく評議員として法人運営に尽力された平塚益徳氏が去る3月10日逝去されたための退任と、学長交替に伴う評議員の交替として、一橋大学長宮沢健一氏の新任（蓼沼謙一氏の退任）、芝浦工業大学長宮地杭一氏の新任（藤井正一氏の退任）、上智大学長柳瀬睦男氏の新任（ヨゼフ・ピタウ氏の退任）が承認された。

▼昭和56年度事業計画案について

協力会員校会費の増額を実施するかわりに利用料金は据置きとし会員校を中心とする利用促進に一層の努力をする。利用目標を前年度目標の二・八%増の五万四、五〇〇人とする。すでに理事会承認をえた賛助会員制を実施し、法人の設立目的ならびに事業に賛同する法人と任意団体に運営参加と協力を求める。懸案の「開館十五周年記念募金」計画の本年度目標を一億二、〇〇〇万円に置き目標達成に努力する、等の計画実施のため、とくに事務局内の体質改善と幅ひろい協力体制の確立が強く要求された。

▼昭和56年度収支予算案について

これについては次号で前年度の収支決算と共に報告の予定。

昭和55年度 第2・3回 共同セミナー委員会

共同セミナー委員会第2回、第3回はそれぞれ10月13日、3月9日、私学会館において岡宏子委員長以下12名、13名の出席のもとに開催された。

第2回委員会においては去る9月11日逝去された故小松茂夫委員に対する哀悼のあいさつが岡委員長よりあり、ついで一橋大学教授杉原泰雄委員の辞任と、同氏に代わり同大学の同僚勝田有恒教授に10月1日付で委員就任の依嘱、承認がなされたことの報告があり、一同の了承をえた。

第2回、第3回を通じて主要な議題は今年度ならびに来年度の各種セミナー企画におかれ、活発な論議がなされ、その具体化がそれぞれの運営委員と企画室にゆだねられた。その内容については次号以下に紹介したい。

昭和55年度最後の会合となった第3回委員会では今期事業の総括報告をめぐって種々の論議がなされた。とくに当初の事業計画にあった大学院共同セミナーと大学合同セミナー（二回のうち一回分）が実施できずに終わったことについて、その原因と責任をめぐり議論のやりとりが行われた。そして最大の理由が企画室の陣容の不備と機能の停滞にあったことを反省

館長就任のご挨拶

中川秀恭

このたびはからずも当セミナー・ハウス館長の役を引き受けることとなった。これまで茅誠司理事長が兼ねておられたのだが、多忙の故をもって私に代ってくれとのたっての御要請もだし難く、お引き受けするに至ったのである。

幸い飯田宗一郎名誉館長も健在であられるので、同氏のご助言とご協力を得て、この重責を果たしたい。

私としては専任職が別にあるので、セミナー・ハウスに常時出勤することはできないが、岡山専務理事をはじめ館員諸君一同と心と力とを合わせ、またこれまでご指導いただいた各大学の教授諸氏のご理解とご協力の下に、セミナー・ハウス設立の理想の実現に向って努力して行きたいと希っている次第である。

これらの方々、並びに当ハウスを支援し、利用して下さった財界の方々、千人会の方々、八王子市の当局、市民各位にたいし、ご挨拶を申し上げると共に、今後何分宜しくお願いします。

中川秀恭氏略歴　一九〇八年島根県生まれ。一九三八年東北大学哲学科卒。東北大学哲学科助手、講師を経て、北海道大学教授、北海道教育大学長。のち国際基督教大学教授を経て一九七五年八月、同大学長就任、現在に至る。専攻は哲学、宗教学。

するとともに、新たに中川館長の就任を機に体制の建て直しをはかり、来年度における計画の実施には責任をもって善処したい旨の岡山専務理事の発言があった。

また今回大学共同セミナーと別に継続企画にのぼらせることになった大学合同セミナーについて、もっと性格をはっきりさせ、独自の機能発揮をめざすこと、準備期間には最低半年間をあてることなどが委員諸氏から企画室に要請された。

昭和55年度 第1回 国際プログラム委員会

都合により開催が遅れていた本年度の国際プログラム委員会が昭和56年3月17日、私学会館において中嶋嶺雄委員長以下8名の委員ならびに日本国際教育協会、大学セミナー・ハウス側数名ずつの参加によって開かれた。

本年度国際学生セミナーは前回セミナーのあとを受けて「文化接触と日本」最終回として予定されていたところ、今年から事務を担当することになった企画室の内部事情から支障が生じ、最終的には正・副委員長と茅理事長との話合いの結果、来年度に延期することに本年1月決められたものである。

その間の経緯の説明が中嶋委員長と岡山専務理事より行われ、そのあと茅理事長、飯田名誉館長からも事態の打開をめぐり、突っ込んだ討議が行われた。

論議をしめくくる形で中嶋委員長より、今こそ理事長以下「ハウスの正常化＝プログラムのできる体制」の自覚に立った問題解決、飯田名誉館長の処遇をふくめての体制再建をとの強い要望が出され、中川館長から目下企画室の人員強化をはかりつつある旨の発言があって、一同協力を約した。

その結果、来年度セミナーに本年度企画を実施すること、期日を10月下旬とし、三輪公忠副委員長以下6名の運営委員で至急具体化をはかることを決めて散会した。

◆千人会……昭和55年12月～昭和56年3月

◇現在会員は一、六四三名です

大学人＝一、二三一名
社会人＝　四一二名

◇新しく会員となられた方々

6名〔第57回報告（申込順）〕

青山学院大学助教授　小林　保彦殿
電気通信大学助教授　荻原洋太郎殿
タイヨー商事㈱　今井　伸子殿
三菱総合研究所　小谷友紀子殿
小野田セメント㈱顧問　上野　孝殿
専修大学助教授　林　勲殿

◇会費ありがとうございます

55年12月～56年3月（敬称略）

藤林宏一、国分康孝、安藤瑞夫、示村悦二郎、近藤保、田中正人、松本樺太、高橋正男、大地羊三、勝木保次、石川明、細田友雄、田中外次、岡惺治、村井資長、赤堀四郎、岡本敏雄、田村光三、江上不二夫、新井益太郎、西巻正郎、讃岐和家、祖父江孝男、吉永フミ、池川都子、川喜田二郎、茂木誠陸、尾田幸雄、川鍋正敏、慶伊富長、内藤正、青木生子、磯部力、外池正治、宮川松男、岡崎正、手塚富雄、奥繁光、井上達雄、和田木松太郎、池田貞雄、清水誠、有山正孝、小西正捷、高橋康之、沢孝一郎、来住正三、関龍夫、佐藤康男、渡辺仁、三浦安子、篠沢公平、高橋彰、三井為友、茅伊登子、築地整、古本捷治、笠原正成、小林保彦、池田温、横沼健雄、杉山好、深沢宏、伊藤文人、久場嬉子、三戸公、大内英吾、徳座晃子、安味貞正、浜川祥枝、坂本菜穂、塚本利明、西田亀久夫、石橋秀雄、島田征夫、平島正喜、木村敏美、須田精二郎、吉田光孝、浮田久子、笠井貴征、蒲生叡輝、薄衣佐吉、福原満洲雄、半谷高久、水野悦子、川端香男里、平松幸一、桑原哲郎、天野成光、高橋恒郎、石井不二雄、佐々木邦彦、米山哲夫、佐藤公子、福島杉夫、中尾信之、加藤利勝、山鹿誠次、杉山吉茂、清水啓三郎、高橋浩爾、岩尾裕純、坂口順治、赤松秀雄、中鉢正美、隈部直光、岩永達郎、市川勝洋、斉藤耕二、渡辺忠胤、遠藤健治郎、山田辰雄、大橋万知江、山田圭一、白井泰四郎、一番ヶ瀬康子、小林哲也、大羽滋、鈴木皇、瀬川渡、大口勇次郎、小菅敏夫、大川章哉、大塩俊介、古田勝久、田村恭、武田昌輔、沼田滋夫、橋本トク、佐藤進、上田明子、東川清一、斎藤信房、大川信明、玉田啓八、青井和夫、森山俊雄、青柳総太郎、宮部直、木村康雄、深沢実、増地昭男、乾崇夫、篠崎武、武藤義夫、中富光国、高山成雄、光延明洋、後藤聰一、高橋源次、福本日陽、本谷勲、鈴木博、田中英夫、石井明、鐘ヶ江信光、谷口修、新井明、松山正男、打田峻一、園田義道、佐藤美喜子、慶谷壽信、大須賀節雄、根岸愛子、田上穣治、河田敬義、瀬野信子、川本茂雄、竹村研一、茅野良男、高村新一、北原文雄、太田正孝、中利太郎、大頭仁、永積昭、遠藤一郎、川崎正三、伊藤洋、松元三郎、小山弘志、上谷琢之、公文俊平、上山碩、原増司、大原恭子、萩原玉味、松原元一、富沢賢治、池井優、加倉井茂樹、原正彦、小川洋輔、関口晃、川喜田愛郎、深山和子、相原光、小林清子、竹中肇、磯野修、守永誠治、中山知雄、清水畏三、内山力、高橋昭三、板橋並治、吉川春寿、中村孝之、稲毛よし枝、小川政亮、村井孝子、玉野井芳郎、金子ハルオ、吉田公保、谷資信、小谷友紀子、今井伸子、島田外志夫、高橋潤二郎、仙田哲、松田正一、山口俊夫、平岡勇、江幡玲子、石井正博、東洋、柳父国近、今井清一、蓮見音彦、西村章子、米川哲夫、牧野誠一、猪瀬博、岩佐凱実、澤本孝久、内藤正、西川大二郎、岩崎代志治、若山邦紘、須賀恭一、近藤圭一、小俣武夫、松島千代野、西田貴子、井原恵治、菊地昌典、石田孝夫、樫崎彰男、力石誠之介、原田敬一、黒沼稔、大岡信、大友賢二、吉田耕作、森昭彦、子安宣邦、斎藤眞、岡田純一、丹下みさお、勢山秀子、一丸節夫、板垣雄三、中岡二郎、田邊留次郎、福永寿巳夫、昌谷春海、小林望、三神勲、寺中良一、前田愛、彦由一太、久保亮五、渡辺忠市、崎野滋樹、野澤晨、今井裕之、中村妙子、小泉仰、熊澤義宣、脇田良一、上野孝、磯直道、京極純一、平野由紀子、坂本是忠、佐藤百世、笠耐、増田武男、瀬田裕司、小竹豊治、増沢利幸、土山牧民、平木典子、伊藤修、河田喬夫、高橋誠、石原忠男、冨子勝久、玉川一郎、門脇卓爾、斎藤忠利、天田俊文、本間仁、平川紀一、宮腰賢、島美喜子、那須宗一、勝見允行、梅村魁、五唐勝、馬越徹、村井実、牛島忠広、一松信、遠藤平治、佐藤直子、谷口汎邦、永野賢、中田良平、新保清子、杉山逸男、平野鉄太郎、豊田陽子、工藤英明、土井恵美子、高橋長太郎、大西清、最上武雄、柘植敏治、山田良之助、石塚司農夫、大泉充郎、若林玄修、遠藤卓夫、村松林太郎、熊坂敦子、鴨澤巌、佐久間章行、渡辺武雄、白川和雄、松尾弘、島田治夫、高橋和之、北村嘉行、佐藤毅、山田牌、天野一夫、土橋信男、小幡史朗、熊田陽一郎、富岡幸雄、岡村総吾、市川邦彦、萩原稔、大田末穂、近藤薫樹、進藤トク、林勲、小山五郎、永井道雄、満田郁夫、太田淳一、三上次彰、木田宏、横田忠夫、高瀬文志郎、原芳男、丸山真男、北村宗彬、池原義郎、小倉芳彦、吉沢四郎、加藤六美、清水雄二、瀬部孝、手塚喬介、向坊隆、望月清司、守屋美賀雄、山澤逸平、池田義人、関口ふさ

●利用状況

＊＝同月2回利用
＊＊＝同月3回利用

■12月

（107グループ、延三、四八二人）

国際基督教大学教授　都留　春夫
中央大学経済学会　平田　光穂
東京都立大学教授　下山　瑛二
東京都立大リーダースキャンプ　古野　豊秋
中央大学講師　矢田　俊文
法政大学教授　松瀬　貢規
明治大学教授　高野　雄一
上智大学教授　佐々木　豊
東京農業大学助教授　成田　徹男
東京学芸大職業科新入生合宿研修　柳沢　治
東京都立大学歴史学研究室　鴇田　忠彦
東京都立大学助手　磯部　力
東京都立大学助教授　高橋　和宏
東京都立大学助教授　清水　英夫
東京都立大学助教授　瀬在　良男
東京都立大学講師　飯島　宗享
青山学院大学教授　鶴岡　義一
日本大学教授　染谷恭次郎
東洋大学教授　中島　国彦
早稲田大学教授　馬場　英夫
早稲田大学教授　伊藤　文人
早稲田大学助教授　山野　康美
早稲田大学助教授　中里　明彦
東京都立大学助教授　森　武麿
東京都立大学教授　山住　正己
東京都立大学工業物理化学研究室　山野　康美
早稲田大学発展方程式研究会　西宮　輝明
早稲田大学教授　渋谷　隆一
早稲田大学講師　片山　覚
早稲田大学助教授　山住　正己
東京都立大学助教授　山野　康美
明治大学講師　中里　明彦
成蹊大学助教授　武麿
駒沢大学助教授　森
一橋大学商学研究会　堀部　政男
一橋大学教授　牛島　忠広
東京農工大学助教授　鈴木　正男
早稲田大学自動操作研究会　向坂　寛
立教大学助教授　増田　茂樹
日本大学教授　鴨　武彦
明治学院大学教授　波木居純一
早稲田大学助教授　山口　和孝
津田塾大学教授　浜下　武志
国際基督教大学助手　荻原洋太郎
一橋大学講師　川原　栄峰
電気通信大学助教授　岡田　昌志
早稲田大学教授　小林　保彦
青山学院大学助教授　長岡　亮介
青山学院大学助教授　十代田知三
津田塾大学講師　村越　邦男
芝浦工業大学教授　田中　尚夫
慶応義塾大学社会心理学初等実験　渡邊　欣雄
中央大学助教授　吉田　倬郎
法政大学教授　野口　裕之
武蔵大学助教授　木畑　洋一
工学院大学助教授　原　誠
東京学芸大学講師　宇野　重昭
東京外国語大学講師　色川　大吉
東京外国語大学教授　尾関　守
上智大学講師　伊藤　喜栄
東京経済大学教授　香原　志勢
早稲田大学教授　須田精二郎
慶応義塾大学教授　畑　聰一
立教大学教授　横田　澄司
工学院大学助教授　大沢綱一郎
芝浦工業大学講師　石川　晃弘
明治大学教授　榎本　肇
東京理科大学教授　樋口　一辰
中央大学教授　山崎　康男
東京工業大学教授　佐藤　豪
東京工業大学助手　花沢　成一
東京都立大学教授　飛田　満彦
慶応義塾大学教授　高橋　進
日本大学教授　山川　仁
東京都立大学教授　徳末　愛子
東海大学助教授　須賀　庸夫
東京都立大学講師　金谷　憲
日本女子大学教授
明治大学助教授
東京学芸大学講師
高千穂商科大学学友会
国際商科大学助教授
都立立川短大教授
独協大学教授
東邦大学教授
第112回大学共同セミナー
都立篠崎高校英語科
日本国際連合学生連盟
フリッソン（第70回大学共同セミナーDセクションの集い）
国際経済商学学生協会
日本生活学会
「中東の社会変化とイスラム」研究集会
府中療育センター
文学教育研究者集団

■1月

（52グループ、延一、三七三人）

学習院大学教授　岡本　哲治
神奈川大学教授　加藤　一昶
立教大学教授　淡路　剛久
芝浦工業大学教授　高橋　清
東京大学助教授　増田　久弥
駒沢大学教授　田中　良昭
東京大学教授　高橋　徹
東京都立大学助教授　鶴田　忠彦
東京大学教授　岡　義達
東京都立大学助教授　稲垣　寛
東京都立大学助教授　中本　正智
東京大学教授　諸井勝之助
東洋大学教授　藤木三千人
早稲田大学教授　中根甚一郎
東京都立大学教授　赤木須留喜
早稲田大学教授　間　宏
明治学院大学教授　小野　哲郎
東海大学教授　師岡　孝次
東京大学教授　高階　秀爾
白梅学園短大教授　田中　未来
白梅学園短大助教授　民秋　言
東京神学大学教職セミナー
第113回大学共同セミナー
青山学院高等部修養会
土質工学会
チトクロームP—450研究会
情報処理学会
三光教会
日本山岳協会

■2月

（125グループ、延四、七三八人）

東京大学教授　木村尚三郎
東京大学教授　米倉　明
日本大学助教授＊　遠藤　邦彦
青山学院大学助教授＊　笹森　健
東京家政大学教授　橋口　英俊
中央大学教授　古城　利明
駒沢大学教授　櫻井徳太郎
鶴見大学教授　井村　君江
慶応義塾大学教授　安達　和夫
上智大学教授　磯見　辰典
中央大学経済学会＊
大妻女子大学教授　渋谷　憲一
津田塾大学講師　中里　明彦
青山学院大学助教授　寺東　寛治
東京女子大学講師　大久保喬柄
早稲田大学助手　棚澤　能生
早稲田大学教授　戸沼　幸市
中央大学教授　杉山　高一
千葉商科大学講師　麻生　幸
駒沢大学教授　阿部　肇一
早稲田大学国際学生友好会　加藤　豊
法政大学助教授　牧野　誠一
明治大学教授　馬場　伸也
津田塾大学教授　長岡　亮介
津田塾大学講師　藤木三千人
東洋大学教授＊　小山吉之助
神奈川大学教授　田中　政男
明治大学教授　五井　一男
中央大学教授
法政大学ユースホステル研究会
東京女子大学「ゆびっこ」
工学院大学講師　加藤　尚武
横浜国立大学助教授　岡田　守弘
法政大学教授　西川大二郎
東京女子大学英語会QGS＊＊
上智大学国際学生交流協議会　岩崎代志治
東京農業大学教授　原　正彦
明治大学教授　美川　漾子
文教大学講師　越智　亘
慶応義塾大学講師　秋元　徹
明治学院大学教授　中村　匠
東京都立大学学生課　若槻　泰雄
玉川大学教授＊
東京経済大学ユネスコ研究会　須田精二郎
工学院大学助教授　小泉　典子
相模女子大学助教授　霜島　甲一
法政大学教授　寺中　良二
駒沢大学教授＊　柿原　篤弥
成蹊大学教授　千葉　正士
東京都立大学教授
武蔵大学体育連合会
学習院大学教授　久雄
国学院大学教授　平林　勝政
神奈川大学助教授　北岡　正敏
東京都立大学助手　横溝　亮一
東京都立大学教授　清水　誠
東京都立大学教授　城座　和夫
東京都立大学助教授　鳴沢　實
東京女子大学教授　倫義
東京理科大学　国分　康孝
東京都立大学助教授　千葉　準一
東海大学教授　谷田　義久
日本大学教授　板倉　宏
杉野女子大学講師　武長　脩行
相模女子大学教授　五十嵐良雄
一橋大学助教授　油井大三郎
武蔵大学教授　横山　定雄
成蹊大学教授＊　川口　浩
中央大学教授　高柳　先男
横浜国立大体育系サークル指導者セミナー
大月短期大学助教授　村越　洋子
産業能率短大リーダースキャンプ
山梨県立女子短期大学助教授

女子聖学院短大講師　阿部真美子
横浜商科大学助教授　浜田　辰雄
桜美林大学助教授　平野　文彦
国学院大学助教授　相馬　順一
都留文科大学教授　平林　勝政
東京観光専門学校ＥＳＳ　和田　明子
日韓学生親喜セミナー＊＊
全関東商業英語連盟
ロシア・アジア関係史研究会
東京松本英語専門学校
万国ローア・バプテスト福音伝道協会

■3月
（109グループ、延五、八七二人）
東京都立大学社会学研究室
東京都立大学教授　金子ハルオ
明治学院大学文化団体委員会
明治学院大学人形劇団ＺＯＯ
東京学芸大学助教授　内田　道雄
日本大学助教授　北原　章男
武蔵工大体育会指導者養成講習会
東京大学助教授　西田　美昭
東京学芸大学教授　大久保典夫

▼第18回大学教員懇談会
主題　大学教育のあり方
―一般教育を中心として―
期日　昭和56年9月26～27日
＜発題講演＞
東京大学名誉教授　朱牟田夏雄氏
一般教育学会会長　扇谷　尚氏
国立教育研究所長　木田　宏氏
＜発題者＞
東京工業大学教授　中條利一郎氏
東京理科大学教授　石川　孝夫氏
中央大学教授　金子　貞吉氏
文部省大学課長　斎藤　諦淳氏
＜世話人＞
大川信明、大山哲雄、河原宏、小林善彦、原口隆英、本間三郎、村上陽一郎の諸氏

═══予　告═══

立教大学教授　有賀　弘
明治大学教授　小島　信夫
成蹊大学文化会
東京農工大学講師　鉅鹿　健吉
早稲田大学ルポルタージュ研究会
立教大学助教授　北岡　伸一
成城大学会計学研究会
東京工業大学教授　松田　武彦
電気通信大学講師　酒井　邦秀
電気通信大学助教授　狩野　紀昭
慶応義塾大学英語会
明治学院大学講師　横山　宏章
早稲田大学教授　大槻　義彦
東京大学一類談話会
東京大学助教授　見田　宗介
武蔵大学教授　横山　定雄
中央大学助教授　斎藤　良夫
駒沢大学文芸批評研究会
武蔵大学教授　村田　晴夫
東京学芸大学助教授　小町谷照彦
青山学院大学Ｅ・Ｓ・Ｓ
立教大学助教授　檜枝光太郎
慶応義塾大学教授　十時　厳周
杉野女子大短大教授　坂口　耕史
早稲田大学教授　西宮　輝明
早稲田大学助教授　鴨　武彦
一橋大学生協組織部
中央大学第二中国研究会
東京都立大学助教授　寺阪　明信
法政大学助教授　小川　孔輔
東大比較文学・比較文化研究室
早稲田大学教授　浦田　賢治
早稲田大学教授　示村悦二郎
青山学院大学助教授　小林　保彦
専修大学教授　田路　健一
聖心女子大学教授　進藤　トク
中央大学経済学会
慶応義塾大学助手　田村　俊作
法政大学福祉問題研究会
専修大学助教授　林　勲
東海大学助手　木谷　弘子
青山学院大学講師　中沢　進一
慶応義塾大学教授　西川　俊作
専修大学教授　望月　清司
中央大学美術倶楽部
上智大学教授　F・ペレス
神奈川大学助教授　橋本　侃
駒沢大学暁法会
駒沢大学助教授　谷敷　正光
明治大学教授　飯田　喜介
日本女子大学教授　徳末　愛子
法政大学助教授　公文　溥
東邦大学講師　巽　幸孚
国際商科大学助教授　米山昭一朗
東京電機大学学生赤十字奉仕団
都留文科大学助教授　川上　則道
第1回大学合同セミナー
日本大学第二高校
印度卒業論文研究発表会
学生年輪の会春の集い
現象学的社会学研究会
代数学ゼミナール
語学教育振興会
日本建築学会
源氏物語研究会
聖霊カリスマ親交会
武蔵野相愛幼稚園

●利用を待つ二つの文庫

昨夏、日米友好基金のご好意によりアメリカ関係図書一セット一六六冊が当ハウスに寄贈され、図書室の一劃に収められた。「アメリカ古典文庫」全23巻、「原典アメリカ史」全5巻など、アメリカ研究のための基本文献として格好のライブラリー。

また、当法人常務理事永井道雄氏より氏の蔵書のうち教育書を中心とする一般向教養書約一、〇〇〇冊が寄贈され、本館ラウンジにコーナー「永井道雄文庫」をつくり、利用者の自由閲覧に供している。

御茶の水キリストの教会
東京松本英語専門学校
多摩地区看護学校教育研修会
文学教育研究者集団
英語教育協議会

＜注＞本号の「利用状況」は紙面の都合で企業関係グループ、個人別用、日帰り利用は省略させていただいた。なお企業関係の利用件数は12月＝7グループ、1月＝11グループ、2月＝21グループ、3月＝18グループである。

●寄贈図書
昭和55年8～56年3月

「アジアの友」6～9　アジア学生文化協会殿
「システム科学研究所紀要」11　早稲田大学システム科学研究所殿
「紀要」3　アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター殿
「卒業生名簿」（昭和55年度）　中央大学学員会殿
「未知の百科事典」(1)　江沢洋殿
「聖經」「新約聖書」　東京台湾教会殿
「会報」42　大学基準協会殿
「工学院大学研究報告」47～48
「第22回　講演要旨」　工学院大学図書館殿
「大学時報」154　日本私立大学連盟殿
「公法理論」11　斉藤　寿殿
「労働問題」8　笠原正成殿
「大学研究ノート」44～46
「大学論集」8　広島大学大学教育センター殿
「国際協力」9～10　国際協力事業団殿
「国際交流」25　国際交流基金殿
「卒論・卒研」　東海大学湘南校舎学生生活研究所殿
「矢内原忠雄全集」（全29巻）　鈴木　皇殿
「佐渡叢書」　松井源吾殿
「男性と女性」「女性解放の思想と行動」「アメリカ女性史」「自立する女性へ」「新しい家庭の創造」「若い女性の生き方」「女性にとって生きがいとは何か」　田中寿美子殿
「判例研究　日本税法体系」4　北野弘久殿
「採集と飼育」11　日本科学協会殿
「Asian Culture」27「ワイルドライフ」　ユネスコ・アジア文化センター殿
「金融経済」184　金融経済研究所殿
「同志社時報」69　同志社大学殿
「社会学論叢」79　笠原正成殿
「Statistical Climatology」　池田貞雄殿
「Gakushuin Series of Treatises」7　学習院大学殿
「憲法教室」　斉藤　寿殿
「変貌した世界の哲学」1～4　尾田幸雄殿

●編集後記

遅ればせながら72・73合併号をお送りします。中川新館長をお迎えし、新しい意欲と構想のもとにニュースの充実をめざしたい。現実を直視し、まず自分の足もとから固め直すこと、他への甘えは禁物と、これは新年の集いの記録を脳裡に再構成しつつの実感です。3月開催の第1回大学合同セミナーについては紙面の関係から次号に記すことをご了承下さい。（岡山）